水辺の旅情

江蘇省 そぞろ歩き

江蘇の魅力は水の豊かさにある。東西には長江が雄大に流れ、南北には中国が世界に誇る大運河が走る。
江南にあっては市中にも無数の運河が縦横にはりめぐらされ、南船北馬をこれほど感じさせる地はない。
マルコポーロが東方見聞録で東洋のベニスと称した姿は、
今、再び輝きをとりもどして旅情を誘う絶好の地として私たちを魅了する。
旅してわかることは、日本人の中国の原風景はここにあるということ、遣唐使、鑑真和上、雪舟、阿倍仲麻呂……
ゆったりとした長江の流れのように、ゆったりと旅したい……江蘇旅情

江蘇省オフィシャルガイドブック

南京	蘇州	周庄
甪直	同里	錦溪
木渎	無錫	宜興
徐州	淮安	高郵
揚州	鎮江	常州
泰州	連雲港	南通

水辺の旅情

江蘇省そぞろ歩き

水辺の旅情
江蘇省そぞろ歩き
Contents

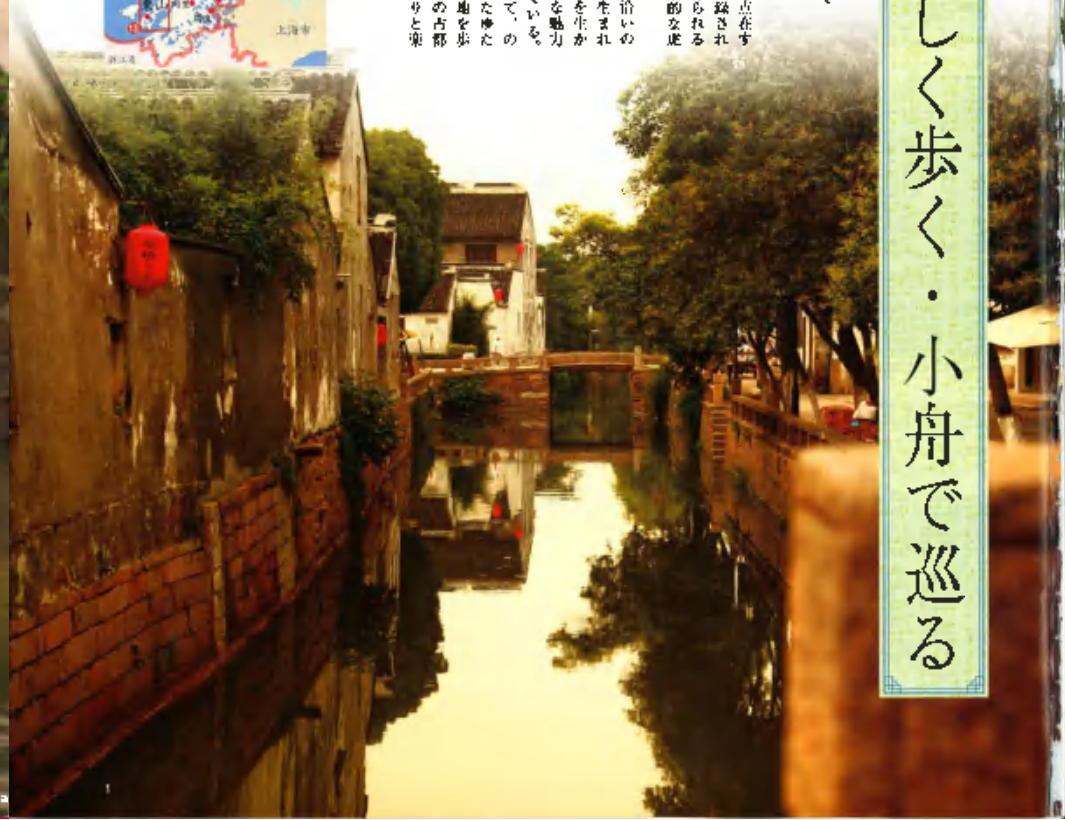
❶ 水の都 蘇州を楽しく歩く・小舟で巡る
❷ 平江路を歩く　そぞろあるきが楽しい古くて新しいスポット
❸ 蘇州一の園林庭園　獅子林
❹ 山塘街から虎丘へ　風景を楽しみ、小舟で遊覧
夜も夜も楽しめて「東洋のベニス」を感じる
❺ 遊覧船で蘇州を巡る
❻ 寒山寺・霊山寺エリアの散策　流行歌と演劇で知られる古刹と景観
❼ 旧城、定慧寺の界隈は下町風情たっぷり
❽ 盧門エリアの散策　緑の中に再現されたいにしえの水の都
❾ 世界遺産「蘇州古典園林」を巡る
❿ 東山鳥景区　絵画を山々に観る古村を訪ねる
⓫ シンプルであっさり　蘇州食の楽しみ
⓬ 江南建築をモダンにアレンジ 新たな名所―蘇州博物館
⓭ 繊細な伝統技術が光る　蘇州刺繍
⓮ 懐かしい水郷古鎮の風情
蘇州の周辺には風情をいっそう感じさせる古鎮が多い
⓯ 甪直　多彩な魅力を見せる人気の古鎮
❶ 水郷の民俗文化を華やかに再現　野外歌舞劇「阿婆周庄」
⓰ 周庄　素朴さが魅力の小さな水郷の町
⓱ 同里　千年の歴史を刻む橋と水路の町
⓲ 鎮湖　美しい橋と湖に囲まれた注目の古鎮
⓳ 木渎　緑豊かな運河と珠玉の園林をめぐる
⓴ 新市　「清明路情」の世界に迷い込む
❶ 匠の技、泥人形
㉑ 震泽　絹織の誇りを訪ねて　いぶし銀の技が光る伝統の産業
㉒ 南京　二千五百年の歴史を誇る明朝の都
❶ 朱元璋の野望が現代に甦る　紫江楼
㉓ 夫子廟　食も夜も楽しめる そぞろあるき
❶ ユニークな南京名物「鴨血石」
❷ 知られざる超美「南京雨花茶」
㉔ 中山陵と明孝陵　緑に抱かれ二人の偉人が眠る
㉕ 南京博物院　42 万点もの収蔵品を誇る
❶ 南京博物院の秘宝 知られざる南京文物
㉖ 甘家大院　明清の生活文化を今に伝える新名所
❶ 高級住宅に囲まれた中庭には 10 万冊収蔵の書庫も―津津楽
㉗ 大運河と町
㉘ 揚州　唐詩と絵画の世界が鮮やかに蘇る漢文化のふるさと
❶ 揚州博物館
㉙ 淮安　明朝末期で栄わった水の都
❶ 淡水の魚が美味しい　淮揚料理
㉚ 高邮　秦観の歌が流れ、大運河のほとりに佇む宿場町
㉛ 鎮江　怪奇な伝説あふれる謎しき都
㉜ 大明寺　日本と中国のかけ橋となった鑑真和上ゆかりの寺
㉝ 工夫の匠と名物料理の数々　揚州文化を楽しむ
❶ 料理、点心、皮の手入れ　「揚州三絶」
㉞ 鎮江　長江の雄大な流れに抱かれた山水の都
❶ 英国作家パール・バックの旧居を訪ねる
㉟ 金山寺　雪舟も訪れた「白蛇伝」の舞台
㊱ 北固山　三国志ゆかりの見どころが集まる
㊲ 常州　温泉湧き出でる湖と竹林の里
❶ 中国全土の恐竜の化石を集めた中国恐竜園
㊳ 溧阳　知名度抜群で注目の知られざる古都
㊴ 瀧霊湖　観光客でにぎわう孫悟空のふるさと
㊵ 南通　黄海と長江に接する風光明媚な観光地
㊶ 江蘇省基本情報

水の都 蘇州を楽しく歩く・小舟で巡る

名所旧跡が山ほどあるこの美しい都で、この町の魅力を伝える風情ある散策コースを歩く目線と、小舟からの目線でご案内します。

古来より「水の都」と称えられ、江南水郷を代表する町・蘇州。幅広い運河や細い水路が網の目のように張られ、水辺に著名園林が美しい佇まいを誇る。蘇州は庭園の町としても知られ、水路や運河の間に、美しい古典庭園が多く点在する。そのうちの九つが世界遺産に登録されており、ほかにも「蘇州夜曲」で知られる寒山寺や、レンガ造りの斜塔が印象的な虎丘など、見どころはつきない。

最近は運河沿いの小道が次々と生まれ変わり、古きを生かしつつ、新たな魅力を生み出している。小舟に揺られて、のんびり水路をたゆたうもよし、路地を歩くもよし。水の古都散策をじっくりと楽しみたい。



平江路を歩く

そぞろ歩きが楽しい 古くて新しい スポット

蘇州の楽しみ方 MAP 1ページ ①

平江路。歩いて楽しい 古くて新しい観光スポット

蘇州を知っている方にも、ぜひ散策していただきたい観光ポイントが「平江路」だ。ここを歩くと「蘇州は確かに水の都だ」と実感させられる。団体ツアーで有名観光地を巡るのもよいが、個人でふらっと散策して出会う風景は、旅好きの方には大きな思い出になるもの。平江路は、水の郷を実感し、思い出に残る、そんな旅の好奇心をそそられるスポットなのだ。

2000年以上の歴史を誇る蘇州だが、庶民の暮らしの中に理もれていた蘇州の中でも古い町並みを、最近手を加えて整備し、観光客も楽しんで歩けるように平江路はよみがえった。昔ながらの蘇州が、そのまんま残っている、と表現してもいいほどである。

古民家を改装したカフェもゆったりとしたひとときが楽しめる。

運河と古橋がつくる美しい風景が平江路の最大の見どころだ。(裕殿恩橋)

獅子林から十分歩いていけるが、近くの東北街からスタートしよう。幅7、8メートルほどのクリークに沿った、ほぼ直線の石畳の小路が続いている。石の小橋がときどき現れ、人が行き交う。昔からの口堂の建物には、骨董と同時に高級ギャラリーやカフェ、骨董店などが入居し、観光の楽しさに華を添えている。ご近所の住人たちが、石橋のたもとに腰かけて談笑していたり、水路沿いで子どもたちが遊んでいたり、子犬と散歩する白髪のご婦人、釣りをしている人もいる。水路を小船で遊覧しているのは、うわさをかぎつけ先取りして訪れたヨーロッパからの観光客か。カフェも多く、ここは安寧、のんびりお茶でもしながら散策を楽しんでいただきたい。写真が好きな方には被写体には困らない。水の風景、人々の暮らし、時間帯も朝、夕、夜でそれぞれの美しさがあるのだ。平江路界隈はかつての豪商も多く住んでいたため大邸宅が多い。一見、表からはそれほどの大きさを感じないのだが、京都の町屋建築のように奥行きの深い家が多く見られる。蘇州の住宅の特色である。ちょうど散策途中でそんな豪邸の中が見られるところがある。中間辺りの路地をちょっと入ったところにある「潘祥園」がそれだ。「潘祥園」は、約300年前に蘇州第一の商人といわれた潘家の邸宅として建てられたもので、典型的な蘇州建築ともいえる。現在は、邸がレストラン、茶館となっており、内部には時代を感じさせる家具や調度品がさりげなく置かれていてセンスが良い。入口は思わず見落としてしまうほどの小ぢんまりだが、中に入るとその奥行きと広さには驚かされる。町の喧騒が嘘のように静かで、老舗まで百年後民りしたような、心落ち着く上質の癒しの空間だ。古さと新しさが融合した平江路は、旅好きには「ぜひ!」ではなく、「絶対」に歩いていただきたい、古くて新しいスポットだ。

観光客の少ない人々の生活にふれる朝、夕もおすすめの時間だ。

豪邸はこの風情に惹かれた欧米からの観光客もあいという。

珍しい屋根付きの橋。電柱嫌。平江路は1本道なので迷うことはない。案内板も整備されている。

センスの高いギャラリーも多い。古民家を改装して使っているのが、通りの風景によくなじんでいる。富裕層が多く住んでいたため大きな屋敷も残されている。

潘祥堂
300年の歴史を誇る建物で、蘇州第一の商人といわれた潘家の邸宅として建てられた。古き良き蘇州風情に浸りながらのお昼は格別だ。

●中国事情 観前街

蘇州一の繁華街 観前街 MAP 1ページ ②

「玄妙観」(観とは道教の寺院)という寺院の門前が蘇州一の繁華街、観前街だ。玄妙観はかつて道教の聖地で、今は三清殿と山門だけが残っている。三清殿は中国で最大級の木造建築物の一つ。通りには様々な商店や食堂、デパート、映画館などの娯楽施設などが建ち並んでおり、観光客をはじめ、有名レストランや百年以上の歴史をもつ老舗の多くも観前街にある。いつ訪ねても賑わっていてまさに蘇州一の繁華街。メインの通りだけでなく、玄妙観の境内もいつもお祭りのように賑わっていて、ぶらり散歩にも楽しいところだ。

い。ある程度客が揃まると、ほとんど音もなく、すべるように船は静かに出発する。

運河沿いに暮らす人々の飾らない素顔にふれる

運河の幅は3メートルくらいで、水は緑色をしており、水面が城壁近くに感じられる。柳をなでる川風が心地よい。

両岸には白壁に黒い瓦屋根を載せた民家が連なる。高度に古びており、人が暮らしているという生活感が感じられる。中には、明清代に作られた邸宅でよく見られる、すかし窓も時折目にえる。

運河に面した階段に座って、洗濯をする人や、のんびり釣りをしている人も見かける。蘇州の人々は、水とともに暮らしていることを実感する瞬間だ。観光地を回るだけでは出会えない、人々の飾らない素顔にふれることができる。

やがて、石づくりの美しい橋が見えてくる。丸いアーチ型の掛けたが3つ並ぶこの巻洞橋は300年の歴史を誇る。丸いアーチの真ん中をくぐる時は、何となく心が躍る。

このあたりから、周囲は緑が多くなり、運河沿いに柳の木が見られるようになる。そろそろ、船は虎丘のふもとに到着する。

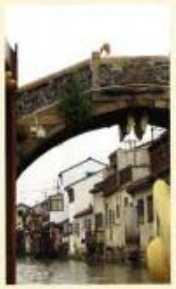
蘇州のシンボル 東洋の斜塔・虎丘に到着

虎丘は高さ34メートルの小高い丘で、約2500年前、越王との戦いに破れた呉王・闔閭がここに葬られた。埋葬の3日後、墓の上に白い虎がうずくまっていたという伝説から、この名がついた。丘の形が虎がうずくまっているように見えるからという説もある。宋代の詩人、蘇東坡の「蘇州に来て虎丘を見ないのは、何とももったいないことだ」という言葉もよく知られている。

最も有名なのは、丘の頂きに建つ八角形の虎丘塔だ。雲岩寺塔とも呼ばれ、宋代の961年に創建された蘇州最古の塔として知られる。からなり、瓦みを荷びたレンガ造りで高さ48メートル。七層からなり、地盤沈下によって約3度傾いているため、「ピサの斜塔になぞらえ「東洋の斜塔」とも呼ばれている。江南でよく見られる仏塔とは異なり、どこかエキゾチックな雰囲気を漂わせる。

虎丘は庭園としても知られ、豊かな緑の中に、数多くの見どころが点在する。深い谷のような剣池は、呉王・闔閭の墓の入口があるとされる場所。池が剣のように細く深いから、あるいは呉王の埋葬品として3000本もの刀が埋められているという説もある。

試剣石は、闔閭が剣の試し切りをしたという言い伝えが残る石だ。石の表面には鋭い切れ目が入っているが、実際には火山の噴出によってできたとされている。こうしたさまざまな伝説を追るのも、虎丘観光の楽しみと言えるだろう。



水郷からの眺めは生活を感じる。

ライトアップされた、山塘街の夜景。実にこの美しいライトアップ効果ゆえ多くの観光客が訪れる。

●中国事情

遊覧船で蘇州を巡る

蘇州の運河で、定期的に運航されている遊覧船コースには、主に2つのルートがある。1つが山塘街と虎丘を結ぶルート、そしてもうひとつが、寒山寺・楓橋と虎丘を結ぶルートだ。

どちらも約16人乗りの乗り合い船で、朝から夕方まで臨時運航しているが、席がある程度埋まるのを待って出発する。このほか、盤門の東の人民橋のたもとからは、外城河を巡る運営コースも出ており、夜だけでなく夜のコースもある。

船頭の漕ぐ定員4人ほどの小さな手漕ぎ船でゆっくりと運河を巡るのも、また楽しい。山塘街や虎丘、平江路などでは、手漕ぎ船で周辺の運河を巡ることもできる。

蘇州遊覧船データ

★山塘街～虎丘間を運航する乗合船の料金は1人25元。ある程度人が揃ったら随時出発。約15～20分間隔で運航している。

★手漕ぎ船の運航区間は、山塘街からほくの新塘橋まで。チャーター料金は1艘100元で、1～4人まで乗船可。

山塘街から虎丘へ

散策を楽しみ、小舟で遊覧

昼も夜も楽しめて「東洋のベニス」を感じる

蘇州の楽しみ方 MAP 1ページ 3.

山塘街は表通りも、裏路地もおもしろい

平江路と並ぶ水辺の町が山塘街だ。白壁に黒瓦屋根の家、運河、石橋と、水郷の風情が感じられる一角だ。歴史的にも古く、唐代、詩人として名高い白居易が蘇州の知事として赴任まもなく、虎丘までの水路を開鑿し、商業地として発展させた。

山塘街は距離にして3キロ。観光地として、古い町並みを保存し、近年再開発され、見事に整備された。レストランや刺繍などのクラフトショップ、古民家を改装してオープンした洒落たカフェやバーなどが軒を連ね、昼も夜も賑わっている。

山塘街の魅力は、表通りから、一歩路地へ入れば、昔ながらの風情が残り、蘇州の人々が普通に生活しているところを垣間見ることができることだ。蘇州でおしゃべりをしている住民がいたり、子供が遊んでいたり、自転車をよけたり……、表通りの観光客で賑わうメインストリートより、昔ながらの風情を見ておきたい方には、ぜひおすすめしたい、生活感たっぷりの裏町散策だ。

山塘街の穏やかな景観。レストランやシルク製品などを扱うクラフトショップがあく、観光客が絶えない。

山塘街から虎丘へは遊覧船がおすすめ。蘇州が水の都であることを実感できる[写真上2点]

街通りから、一歩路地に入ると、人々の日常生活に触れることができる。昔ながらの風情を感じたい人には、裏通りもおすすめだ。

明清時代を再現した街からレトロな船で20分の小さな旅

蘇州は運河や水路の街。水路や運河沿いの道をのんびり歩くのも楽しいが、遊覧船に乗って、水上から街を眺めてみれば、また違った風景が楽しめる。

蘇州の運河巡りにはいくつかのコースがある。中でもよく知られているのが、明清時代の古い町並みを再現した山塘街から北内に延びる運河を進み、蘇州を代表する見どころの一つ、虎丘へ向かうルート。約20分の船旅だ。もちろん、帰りも虎丘から再び山塘街へ船で戻ることができる。

乗るのは約15人乗りの、「バッテリーボート」と呼ばれる屋根付きの電気船。赤茶色の木製で、船内の椅子やベンチも木で作られており、レトロで心和む雰囲気だ。

客席と操縦室は隔てられておらず、操縦上のおじさんがバスのような丸いハンドルをあやつる様子を間近で眺められるのも面白い。

盤門 エリアの散策

緑の中に再現されたいにしえの水の都

蘇州の楽しみ方 MAP 1ページ ⑤

2500年の歴史を語る珍しい水陸両用の城門

蘇州の町は、外城河と呼ばれる運河が、市街の中心部を四角く取り囲んでいる。今から約2500年前の紀元前514年、春秋時代の呉の国王、闔閭がこの地に蘇州城を築き、蘇州の町の歴史が始まった。

外城河は城の外濠としてつくられたもので、かつては8つの城門が設けられた。その中で唯一、今も同じ場所に現存しているのが、外城河の南西部の角に位置する盤門だ。創建以来、何度か再建されており、花崗岩を積み上げた現在の姿は元代に作られた。

盤門は、城壁と水門の両方の役割を果たしており、水陸どちらからでも出入りができる世界でも極めて珍しい門だ。

広々とした緑の中に古風な楼閣やあずまやが点在

盤門の周囲は盤門景区と呼ばれ、豊かな緑の中に大きな池が広がる美しい公園となっている。その中に、いにしえの時代を思わせる建物やあずまや、回廊などが点在しており、水の都として栄えた往時に思いを馳せながら、ゆったりと散策することができる。

最も目をひくのが、盤門景区の東端に天高くそびえる七層の瑞光塔だ。蘇州で一番最初に建てられた博宗の仏塔で、創建は今から約1800年前の247年。三国志で知られる呉の孫権によって創建されたと言われる。

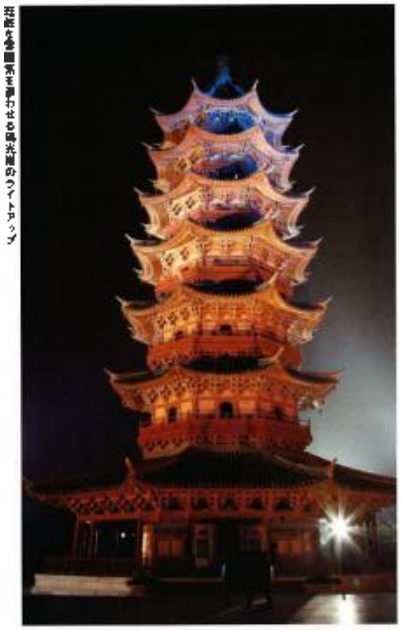
その後、北宋時代の1004年に再建されたが、度重なる戦乱により被害を受け、清代に大きな損傷を受けた。高さ53.6メートルの現在の塔は、近年再建されたものだ。

夜風に吹かれながら光に彩られた外城河沿いを散歩

盤門景区から正門を出て、日の前の東大街を南に向かって進むと、すぐそばを流れる外城河のほとりに出る。ここは老年の中に緑の木々が植えられ、遊歩道も整備され、気持ちのよい散歩道になっている。

河を行き交う船を眺めながら、日中にのんびり歩くのもいいが、夕暮れから夜のそぞろ歩きもまた、楽しみの一つだ。夜になると、河べりの遊歩道や橋などが、この一帯は美しくライトアップされる。東大街から外城河を渡る瑞園橋の上からは、西に阊門橋、東に人民橋と、光に彩られた2つの橋を望むことができる。

盤門景区の正門は夜になると閉まり、中に入ることができないが、瑞光塔は夜10時頃までライトアップされる。暗い空をバックに、青みがかった光に照らされて浮かび上がるその姿は、どこか神々しい印象を与える。外城河沿いから見上げれば、その姿を見ることができる。



五層を金閣寺を思わせる瑞光塔のライトアップ

美しくライトアップされた瑞園橋。ここから白外城河の夜景を楽しむ

瑞光塔の上から盤門景区と蘇州の町並みを望む

楓橋・寒山寺 エリアの散策

流行歌と漢詩で知られる古刹と景勝

蘇州の楽しみ方 MAP 1ページ ④

鐘の音で知られる古刹「蘇州夜曲」ゆかりの寒山寺

1940年の李香蘭の上海歌劇「支那の夜」の主題歌として作られた「蘇州夜曲」。情緒あふれる歌詞で、まだ見ぬ異国への憧れをかき立てた。この歌に登場するのが、蘇州の町の東端に建つ古刹、寒山寺の鐘だ。

寺は今から1500年前、南北朝の梁の時代に創建され、およそ100年後の唐代に現在の名前に改名された。緑に囲まれた閑静な境内に建つ本殿などの建物は、清代に再建されたものだ。

本殿にあたる大雄宝殿のすぐそばに、鐘楼の鐘楼が建っており、二階に上がると歌に歌われた大きな鐘が天井からつり下げられている。青銅で作られた唐代風の鐘は、清代に日本から贈られたもの。一人3回までなら、誰でも自由に叩いて、その響きを楽しむことができる。毎年、大晦日になるとこの寺の除夜の鐘の音を聞きに、数多くの日本人が訪れるという。

鐘楼と本殿の背後に、心とさわ高くそびえる五層の仏塔は寒山寺のもう一つの見どころ、北塔寺院だ。高さ42メートルの楼閣で、唐代風の建築様式を用いて1996年に建立された。均整のとれたその姿は、夜になると美しくライトアップされ、幻想的な雰囲気に包まれる。

境内の水には鯉かけの赤い魚が無数にかけられていた

「蘇州夜曲」で日本人に親しみの深い鐘楼。この2階に鐘がある。上は鐘楼

漢詩「楓橋夜泊」に歌われた橋から運河の眺めを楽しむ

寒山寺のすぐそばには、北京と杭州を結ぶ京杭大運河が流れている。運河の中には細長い中洲が横たわり、そこにかけられたアーチ型の大きな石橋が印象的だ。唐代の詩人、張継が都から故郷に帰る途中にこの橋を通り、船を停めて一泊した。この時に歌った漢詩「楓橋夜泊」は広く親しまれており、寒山寺にはこの漢詩の碑が残されている。

楓橋のたもとには、緑に囲まれた石塀の上に、赤い壁に黒い瓦屋根をいただく駱駝橋がある。明代の1557年に建てられた鉄鈴関だ。建築の保護から蘇州城を守るために造られた望楼で、鉄鈴関と楓橋の組み合わせは記念写真スポットとして人気だ。

江枫洲と呼ばれる中洲は、緑の中に古風な家並みが再現され、楓橋夜泊の世界を再現したようなノスタルジックな風情が漂う。運河の流れを眺めながら、のんびり歩くのもいい。楓橋のたもとからは遊覧船も運航しており、江枫洲の見どころを巡るほか、虎丘へも行くことができる。

「蘇州夜曲」で日本人に親しみの深い鐘楼。この2階に鐘がある

双塔、定慧寺の界隈は下町風情たっぷり

MAP 1ページ ⑥

平江路にもほど近い、古い下町の定慧寺通りに、双塔が建っている。見どころの多い蘇州で、あまり観光客のいない静かなお寺で、双塔のある双塔禅寺は唐代に民間の寄付で建造されたといわれている。双塔は北宋の時代の982年建立された。この双塔から南へ運河沿いの通りは、観光客の多い山塘街や平江路と違い地元の人々の生活エリアとなっており、運河のすぐ横は住宅の花や濃い緑にあふれ、通りを挟んで市場や様々なお店が並んでいる。庶民感覚あふれる下町風情が感じられる散歩道だ。

シンプルであっさり 蘇州食の楽しみ

蘇州料理は、川魚を中心にあっさりした味付けを特徴とする。代表的なのが蘇州のそば介鮮「太湖三白」で、白魚はカワヒラという白身の魚、鯉魚はシラウオに似た半透明の小魚、白蝦は淡い色の小エビを指す。白魚は蒸して、鯉魚は卵とじ、白蝦は塩ゆでなど、シンプルな調理法で、新鮮な素材の味を楽しむことができる。

このほか、鯉魚という白身の川魚もよく使われ、からりと揚げて甘酢のあんをかけた「松鼠桂魚」もポピュラーな一品だ。太湖産のエビを地元名産の緑茶・碧螺春と合わせて煮た「碧螺虾仁」も蘇州ならではの味覚。太湖産のジュンサイのスープも優しい味で日本人の口に合う。街中の食堂では創様であっさり塩味の蘇州麺が、庶民の味として人気だ。

からっと揚がった「松鼠桂魚」

白魚

蘇州麺

ジュンサイ

白魚目覚

日本人好みのあっさり味で、どれもシンプルな料理法で新鮮しい

留園

MAP 1ページ ⑦

蘇州を代表する中国四大庭園林の一つ

明代の1593年に創建され、蘇州四大園林の中で最初に建設された。美しく配された池や古木、江南庭園の特徴を凝縮した存在だ。3つのエリアに分かれた園内のハイライトは中部。精緻な装飾の建築群が池の周囲を囲み、園歴の長さは庭代の建築による石刻が300以上ものこされている。蘇州の世界遺産である留園は、中国でも屈指の巨大な庭園として見応えだ。

拙政園

MAP 1ページ ⑧

豊かな緑に囲まれた「水の庭園」

明代に造られ、園内と隣接する中国四大園林の「三」数えられる。敷地面積は5万2千平方メートルと、蘇州四大庭園で最大の広さを誇る。園内は自然の美に恵まれ、自然の美しさを生かした景観が特徴で、庭地の約 割を広大な池が占めており、「水の庭園」としても知られる。

現代庭園芸とは島の外に建つ庭の北庭園見学の情景が楽しめる。

世界遺産「蘇州古典園林」を巡る

蘇州には明清代にかけ、個人庭園が造られ、今も60ヶ所以上が残されている。中でも有名なのが、「蘇州四大園林」と呼ばれ、世界遺産に登録されている。

獅子林

MAP 1ページ ⑨

太湖石の奇岩群が有名

9区の獅子が並んでいるように見える太湖石の奇岩群「九獅峰」があることから、その名がつけられた。園歴は元代で、清代に大幅な改修が行われた。太湖石を積んだ築山と湖面が有名で、築山の周囲は1153平方メートルにも及ぶ。園内には広大な池があり、船に乗ってあずまやや、ジグザグの橋などが配されている。植物を巧みにランドマークを演出している。

滄浪亭

MAP 1ページ ⑩

宋代に造られた蘇州最古の庭園

宋代の詩人・蘇舜欽によって創造され、現存するものでは蘇州で最も古い庭園。四大庭園の中では最も小さく、素朴な風情だ。ここは園内だけでなく、外側からも眺めを楽しめるのが特徴で、塀をからめる外の本路にはあずまやが浮かび、その後ろに豊かな緑が広がる。うっそうとした竹林を配した園内は一面四季を感じられ、中国の小さい静山から園内を望める。

●中国車窓

MAP 1ページ ⑪

緑深き山々に眠る古村を訪ねる 東山風景区

蘇州の中で、太湖に突き出た半島にあるのが東山風景区。周囲約40キロの土地には、いくつかの小高い丘が並び、数多くの明代の建物が残る。人気の観景地ということもあって、太湖沿いに寺もあるいくつもの民宿に滞在して、太湖を一望する庭園や、紫金庵を初めとする山中にたたずむ寺院を訪ねる人も多い。とくに、まるで生きているかのように表情豊かな十六体の羅漢像や、とても泥で造られているとは思えないほどなめらかな仏像は、紫金庵の宝である。

東山風景区のなかには、ひっそりと佇む古村がある。それが、陸巷古村だ。6家族によって治められていたことから、村の中には8つの路地がある。この村の出身者から科挙の合格者が出たことから発展した。その合格者の実家は、敬和堂という名で現在公開されており、その当時の富裕層の生活ぶりがよくわかる。それだけではない。そこかしこに村が栄えていた頃の名残を見ることができる。まだ観光地化されていないので、説明が書かれた看板は何もないが、多くの人や物資を運んできた船のための船着場や人々が行き交う市場の跡が残されている。当時の村の賑わいを思い浮かべながら、どこへ行くでもなく気ままに小さな路地を散策することができるのも、この村の魅力だ。

MAP 1ページ ⑪

江南建築をモダンにアレンジ 新たな名所 蘇州博物館

獅子林や拙政園のそばにある蘇州博物館が、2006年10月に全面改装され、新たにオープンした。白を基調にしたモダンなデザインの建物で注目を集めている。

建物を設計したのは中国系アメリカ人の建築家、I.M.ペイ。ルーヴル美術館のガラスピラミッド、香港の中国銀行ビルなど、数多くの有名な建築を手がけた世界的な建築家だ。幼年時代を蘇州で過ごしたことがあるというペイは、蘇州の古典庭園の様式や江南の伝統建築を現代的にアレンジ。スイレンの池に浮かぶあずまや、くりぬき門など、蘇州の庭園でよく見られるモチーフをモダンに生まれ変わらせている。

蘇州博物館は入場無料で、蘇州とその近辺から集めた中国の伝統美術約3万点を所蔵している。虎丘の雲岩寺塔や盤門の瑞光塔に収められていた仏教文物、呉の時代の書画などが見どころだ。

MAP 1ページ ⑫

繊細な伝統技術が光る 蘇州刺繍

蘇州の代表的な特産品の一つに挙げられるのが刺繍だ。湖南、広東、四川と並び中国四大刺繍の一つに数えられ、その精巧な技術で広く知られている。その伝統技術を今も守り続けているのが町の東側、景徳路に面した蘇州刺繍研究所。100人以上の技術者が在籍し、2階のアトリエでは刺繍の製作風景を見学することができる。1人で1作品を担当するのが決まりで、30cm四方のもので2〜3ヶ月かかるという。さまざまな色糸を少しずつ刺していく様子は、まさに絵を描いているようだ。

1階は土産物店となっており、広い店内ではさまざまな刺繍製品を販売している。手軽に買えるハンカチから、額縁に入った絵画のような美しい作品まで種類もいろいろ。繊細な手仕事を旅の思い出に持ち帰ってはいかがだろう。

蘇州の周辺には旅情をいっそう感じさせる古鎮が多い

絵になる水郷古鎮の風情

周庄

多彩な魅力を見せる人気の古鎮

風情溢れる水路沿いを歩き絵になる「双橋」を渡る

上海から西へ60キロ、蘇州の南東部にあるこの周庄は、江南水郷を代表する水郷古鎮の一つ。その起源は北宋時代にさかのぼり、明代から清代にかけて発展した。900年以上の歴史を誇る、水郷古鎮の中でも人気の観光地として知られている。

今は区切りのよい形で保存されているが、四方を川に囲まれているため、ふつうにはまだ水の中の孤島だった。このため、古くから水上交通が発達しており、物流の拠点として栄えた。

古街と呼ばれる周庄市街は、それほど大きくはなく、のびのびと歩くことのできる分量である。町の中には4本の運河が流れ、その周囲に沿って建てられた民家はそのそれぞれが明代から清代にかけて建てられたもの。白い漆喰の壁と黒いタイルの瓦屋根が、いにしえの風情をそこに伝えている。

この町の見どころとして知られるのが、「双橋」と呼ばれる世繁橋と永安橋だ。一字に交わる運河の真ん中に、陸揚げされたアーチ型の世繁橋と陸揚げ状の永安橋、形の異なる2つの石橋が一字型にかけられている。

いずれも明代の16世紀後半から17世紀前半に造られたもので、昔の建築の形に似ていることから、古寺橋とも呼ばれる。絵になる人気の記念撮影スポットとして、常に多くの観光客で賑わっている。

富安橋から遊覧船を望み伝統料理「万三蹄」を堪能

周庄のもう一つの見どころが、町の中心にあるアーチ型の石橋、富安橋だ。数回に渡って修復されているが、最初に建造されたのは1355年とされ600年以上の歴史を誇る。橋の上からは、情緒にあふれた水路と家並みを一望することができる。すぐそばの遊覧船乗り場から出ている船が、橋の下をくぐっていく眺めも楽しい。

富安橋のすぐ近くに、1742年に建造された周庄「沈厅」は、1744年に建造された周庄を代表する富豪の邸宅。その時代にこの地に移住した、南宋にゆかりのある沈万三の子孫が建てたものだ。

沈厅は非常に広く、5つの建物に分かれ、庭の数が数えられている。中でも、正厅と呼ばれる建物の前にある、精巧な彫刻を施したレンガの門は見どころだ。そのすぐそばに建つ、明代に建てられた邸宅、東厅と北厅、水郷地帯の典型的な建築と言われている。

特産品を売りに、町の人々の暮らしに支えられた観光地として知られる乾隆橋と水郷巡り船

流れ三が周庄に残した名物や逸話は数多いが、その一つに「万三蹄」がある。来客をもてなすために考案された料理で、豚の地ろ足を醤油や酒、陶器とともにとろ火でじっくり日数を掛けて煮込んだもの。表面がコクのあるあめ色で、肉も骨も柔らかく、口の中で溶けるような味わいだ。

今は周庄の名物料理として広く知られており、町中のレストランはもちろん、持ち帰り用に路地の店先でも売られている。

古民居の宿に滞在し静かな朝夕の町を散策

周庄は日帰りでも十分楽しめるが、人気の観光地とあって、朝9時から夕方5時頃までは、常に喧騒に満ちている。一方の水郷古鎮に比べ宿泊施設も揃っているので、一泊して静かな夕と朝を散策するのもいい。

旧市街の外には設備の整った大型や中級ホテルが数軒あるほか、旧市街の中にも古民家を改装した小さなゲストハウスが15軒ほどあり、古鎮に暮らす雰囲気が味わえる。

宿泊すると、日中とは違う町の表情が見られるのが魅力だ。朝早い時間の町は、まだ静けさに包まれ、いつもは観光客で混み合う双桂堂や富安橋を心ゆくまで眺めることができる。川で洗い物をしたり、店を開ける準備をするなど、ここに暮らす人々の素顔をかいま見られるのも朝ならではの楽しみだ。

夜は橋や建物が美しくライトアップされ、幻想的な雰囲気に。建物の軒先に掲げられた赤い提灯が、ノスタルジックな雰囲気を醸し出す。夜の遊覧船に乗って、町の灯を眺めながら静かな水路を巡るのも、楽しみだ。

大半は近くにあるような居・庭園部、わずかな部屋しかなく、調子がよいと言ったら、第5階いた度がある

出発では、シャスミンや菊の花の外茶が振られている。客待いっぱいにお茶を注めてくれた

川沿いはいつも賑わいの場。どこからともなくこんなものが寄ってくる

明代に作られた邸宅であるという。中庭は、盆栽が添えられている

夜は美しくライトアップされて、幻想的な雰囲気に。ゆったり散策が楽しめる

●中国専稿

現代の芸術と伝統の演出で、江南水郷の生活文化を再現

水郷の民俗文化を華やかに再現
野外歌舞劇 「四季周庄」

2008年から、周庄で新しいアトラクションがスタートした。華やかな歌と踊りで、周庄の四季と生活文化を再現する野外歌舞劇「四季周庄」だ。

町の水路や橋、東屋なども舞台の背景として活用。朝もやのようなスモークの中から水路を進む小船が現れたり、この地方で魚捕りに使われていた鵜がいっせいにはばたくなど、江南水郷ならではの伝統文化を現代的にアレンジ。

アクロバティックなアクションあり、美しい群舞や幻想的なシーンありで、誰でも楽しめる演出になっている。ダイナミックな照明や音楽も美しい。上演時間は1時間で、4月から10月まで毎日上演される。

甫直

素朴さが魅力の小さな水郷の町

歴史を物語る40もの橋を見ながら運河沿いを散策

上海の東60キロ、蘇州の西18キロに位置する甫直は、いくつもの運河に囲まれた面積1平方キロほどの小さな町。その歴史は2500年前の春秋時代にさかのぼるとされ、明清時代の町並みを今もそのまま残している。数ある水郷古鎮の中でも、ひときわこぢんまりとしているが、見どころも多く、素朴な風情を楽しみながらそぞろ歩きを楽しみたい場所だ。

現在も船を使って西側に渡るおばさん

町の中を流れる細い運河沿いにはクスノキの老木が連なり、その後に石畳の道が続く。甫直は橋が多い町としても知られ、かつては72ヶ所もあったというが、現在もそのうちの40ヶ所が残っている。

古くは宋や元の時代に造られた橋もあり、使われている石の素材や形もさまざまで、さながら橋の博物館といった雰囲気。30分ほどの遊覧船コースもあり、民俗衣装に身をまとった地元のおばさんの歌声を聞きながら、手漕ぎ船に乗って橋をくぐり、水上からの眺めを楽しむこともできる。

さまざまな橋があり、その後は石畳の道

屋根付きの「廊棚」を歩き町の人々の素顔にふれる

この町のもう一つの特徴が、運河に沿って約200メートル延びている「廊棚」だ。町を南北に貫く中市上塘街に造られた屋根付きの通りで、今でいうアーケード街である。

通りを覆う黒い瓦屋根の軒先には赤い提灯が連なり、ノスタルジックな風情を醸し出している。運河を渡り、反対側に延びる中市下塘街から、この廊棚を眺めるのもまた違った趣が味わえる。

廊棚には運河に面して木製の長いいすがしつらえられており、歩き疲れたら、ちょっと座って運河を眺めるのも一興だ。竹かごを抱えた主婦が野菜をより分けていたり、老人たちが腰かけて談笑するなど、地元の人々の憩いの場にもなっており、飾らない素顔にふれることができる。

廊棚は雨でも安心

廊棚のある中市上塘街の南端から東に位置する保聖寺は、創建は508年と古く、江南を代表する名刹の一つとしても知られる。見どころは宋代の1013年に作られた「羅漢堂塑」。行列に18体の羅漢像を彫り込んだもので、現在は9体が残されている。薄暗い中で浮かび上がるその姿は迫力があり、見る者に力強く迫ってくるようだ。

中市上塘街の北端にある張宅は、甫直で最も保存状態がよい清代の私邸として知られる。所有者の孫であり、香港の大スターでもある映画女優、張芳芳（ジョセフィーヌ・シャオ）の博物館にもなっており、その実績を辿ることができる。

かつて米の集配所だった「万盛米行」。今は民俗博物館となっている

クスノキの木陰を歩いたり、流れる運河、橋間も歩いたり、流れるよう

錦溪

美しい橋と湖に囲まれた注目の古鎮

2500年の歴史を誇り 南宋の妃がこよなく愛した地

錦溪は近年、素朴な風情と美しい景観で注目を集めている水郷古鎮。上海から西へ

運河沿いに、古い木造のアーケード「廊棚」が連なる

50キロ、蘇州から南東へ40キロ、船で2時間ほどの距離にある。一般公開されたのは2000年からと、観光地としては比較的新しいが、その歴史は古く、約2500年前の呉越春秋時代には、既に町として成立していたとされる。

古鎮への入口となる牌坊をくぐると、広い池の真ん中に浮かぶように、ゆったりと蛇行する道が続いている。道をはさんで右は曼陀南、左は古蓮池だ。歩きながら、両側に広がる絵のような風景を楽しむことができる。

古蓮池に目をやれば、水面を覆うハスの葉のように、蓮模様きの波り廊下のような美しい古蓮橋がかかっている。7月にはハスが満開になり、ひときわ優雅な眺めとなる。

古蓮橋の向こう側に茫洋と広がるのは五保湖で、小島がぽつんと浮かんでいる。南宋の2代目皇帝・孝宗の夫人の睢妃はこの地をこよなく愛し、錦溪で病死した。孝宗は五保湖に島を作り、妃を葬った。それがこの睢妃永塚だ。

水郷で船を漕ぐ地元のおばさん

長堤沿に出しで建つ古寺、蓮池禅院の前には、木造の手漕ぎ船がたくさん浮かんでいる。船はここから五保湖に出て睢妃永塚の島巡りを過ち、再び蓮池へ戻って運河を進んでいく。船頭のおばさんの歌声を聞きながら、広々とした湖から運河沿いの素朴な町並みへと、変化に富んだ風景が楽しめる。

手漕ぎ船で水路から五保湖へ

素朴な家並みと多彩な橋を巡り 運河と人々の暮らしにふれる

錦溪は橋の多い町としても知られており、町の広さは1平方キロに満たないが、その中に36の橋がかけられている。作られた年代も形もさまざまで、橋を眺めながら歩くのも楽しい。

運河は澱塘河から北に向かって延びており、一番南にある石造りの橋が普慶橋だ。明の初代皇帝・朱元璋がこの地を視察で訪れた際、風水的に、運河が龍の形をしており、皇帝が生まれる地相だ」と告げた。自らの地位が脅かされるのを恐れた朱元璋は、龍の首にあたる場所にこの橋をかけ、未来の皇帝が生まれるのを阻止したと伝えられている。

水路沿いに素朴な町並みが続く

運河の両側はのどかな町並みが続き、西側は石畳の道、東側は「廊棚」と呼ばれる屋根付きの木造アーケードとなっており、買物などを楽しめる。土産物屋や茶房、食堂などは普慶橋の近辺に集まっている。

運河沿いをのんびり歩いていくと、庶寿街という通路に出る。この道を進むと、商店街は途切れ、民家が多い静かなエリアとなる。胡跡橋のすぐそばに小さな青空市場が出ていた。とれたての川魚や川エビがピクピクしたまま山積に並び、近所の人々で賑わっている。こうした素朴な生活感にふれられるのも、この町の魅力と言えるだろう。

長寿街のそばで開かれていた青空市場。さまざまな川の魚が並ぶ

同里

千年の歴史を誇る橋と水路の町

福を呼ぶ三つの橋を巡り 世界遺産の退思園へ

蘇州の南、約18キロに位置する同里は数ある水郷古鎮の中でもかなり広く、見どころが多い町だ。その歴史は1000年以上と古く、かつては「富士」という名前だったが、唐代から現在の名前になった。

同里で最も有名なのが、町の中心部で丁字型に交わった運河を囲むように集まる太平橋、吉利橋、長慶橋の「三橋」だ。中国では三つの橋は縁起がよいとされ、新郎新婦がすべての橋を渡ると末長く幸せになると言われる。

錦溪から退思園の中間、中央に太平橋の姿が見えるところ

三橋の一つ、長慶橋。上に吉利橋、奥に太平橋がある

三橋の周囲はいつも賑わっており、中国人カップルが記念撮影をする姿がよく見られる。橋のたもとでは鴛鴦形に婚礼衣装を貸し出しており、若い女性達が楽しそうに着やかな衣装を選ぶ姿も見られる。

その東にある退思園は、同里を代表する見どころだ。清代に造られた元軍人の私邸で、2000年に世界遺産に登録された。退思とは反省を意味する。

さまざまな店が並ぶ同里通

中庭には、池を取り囲むように建物が並び、水上の楼閣といった雅な風情を漂わせる。中でも印象的なのが、壁一面を繊細なすかし窓が覆う。船をかたどった水上のあずまやだ。頭上高く伸びる橋や庭の古木など、美しい緑も目を楽しませてくれる。

100年以上の歴史を誇る 南園茶社でひと休み

同里は橋が多い町としても知られる。その数は49にのぼり、形も造られた年代もさまざまで、最も古いものでは600年の歴史がある。散策しながら、いろいろな橋を見比べるのも楽しい。

町を巡る水路は迷路のように入り組んでおり、その間に並びる道は狭い路地もあれば開けた通りもあり、変化に富んでいる。江南の水郷の町はよくベネチアにたとえられるが、中でも同里は特に雰囲気が似ていると言えそうだ。

同里はレストランやカフェも充実している。運河沿いには色とりどりのパラソルやチェアが並び、飲み物を片手にのんびり座っている人々の姿があちこちで見られる。いろいろな店があるので迷ってしまうほどだが、同里の歴史を肌で感じられる老舗が、町の南側、人民路のそばにある「南園茶社」だ。

清代末期に建てられた2層建てのこの茶館は、かつて多くの文人達が集ったという。今も当時の雰囲気をそのまま残し、ゆったりと広い店内にはノスタルジックな風情が漂う。外の賑わいからも隔てられ、しばしくつろぐのに最適の場所だ。

さまざまな種類のお茶が揃うほか、料理メニューも充実。ジュンサイや川魚など、地元の食材を使った江南料理が楽しめる。

南園茶社
四重茶館の佇まい

木渎
緑豊かな運河と珠玉の庭園をめぐる

明清時代の美しい庭園が運河沿いに点在

蘇州から南西へ車で約30分、木渎は香渎、胥江という2つの運河に囲まれたこぢんまりとした古街だ。町は丫字型に交差する運河を中心に広がり、それぞれの運河に沿って民家が建ぶでいるので、水辺の風景を眺めながらそぞろ歩きが楽しめる。

主な見どころは、町の北側を流れる香渎沿いの山塘街に集まっている。香渎の両岸にはあふれんばかりに緑が茂り、運河にかかる橋にもツタやつる草がからまって、野趣溢れる雰囲気。梅の水郷古鎮とはひと味違う風情を味わうことができる。

木渎は庭園の町としても知られ、明清の時代には、30以上の私陽の庭園があった。その一部は今も当時のまま残り、訪れる人々の目を楽しませている。

山塘街の東端にある蔡家花園は、明代に造られた私陽で、木渎を代表する庭園の一つ。園内は塀で区切られ、流り廊下で結ばれた5つのエリアに分かれており、それぞれ趣が異なり、変化に富んだ眺めが楽しめる。

蔡家花園から山塘街を西に進むと、もう一つの庭園、虹飲山房がある。こちらは清代に造られたもので、中央に広がるハス池が見事だ。池の端の高台から、庭全体を一望することができる。清の乾隆帝はこの庭園がお気に入りで、6回も訪れたという。

山塘街の西端にある庭園、古松園は500年の樹齢を誇る松の木があることで知られる。町の曲線を流れる香江沿いの斜街にある邸宅、藕園府第は石とレンガと木を組み合わせた独特の建築様式「江南三園」が見どころだ。

蔡家花園の中庭。江南独特のすりかえった屋根のあずまやが印象的

手漕ぎ船に揺られて水面に溢れる緑を眺める

香渎の水路沿いにあふれる緑の眺めは、徒歩しながらでも十分楽しめるが、さらに間近で眺めるなら、遊覧船に乗るのがおすすめだ。

蔡家花園と虹飲山房の間に遊覧船の乗り場があり、船はそれぞれの庭を行き来している。所要時間は15分ほどで、待っているのは木渎の手漕ぎ船。乗り込めば、地元のおばさんが船を力強く漕ぎ進める。

船に座って運河を眺めていると、両側に緑が迫り、通りからとはまた違った眺めが展開する。水面に枝をたれる柳の木や、運河に向かって勢いよく伸びる幹本は、手を伸ばせばすぐ触れそうだ。緑で覆われた橋を見上げながら下をくぐっていくのも、また楽しい。

柳の新芽が芽吹く3月は、桃の花や「迎春花」と呼ばれる黄梅の花が咲き誇り、格別の風情が楽しめるという。短いが、のんびりとしたひと時が過ごせる船旅だ。

橋も両岸も緑に覆われた水渎の運河。橋の下を遊覧船が行き交う。柳の新芽が芽吹く3月は、桃の花や黄梅の花が咲き誇り、格別の風情が楽しめる。

虹飲山房のハス池をくぐり抜け門から望む

無錫
「無錫旅情」の世界に迷い込む

太湖に浮かぶ鼈頭渚公園

蘇州から東へ車で西へ1時間、蘇州と同じように太湖のほとりにある無錫。街の名前は、昔の時代には産出されていた錫が、のちに結晶してしまったことに由来している。街の中を京杭大運河が流れており、昔から運河が盛んな場所でもあった。人口610万人ほどの中都市でありながら、近年、高速道路も次々と作られ、急速に近代化している街でもある。

しかし、無錫は工業だけではない。太湖は観光地としての無錫も育んできた。太湖とその西南にある五里湖にはさまれたところにあるのが、鼈頭渚公園。公園の形がすっぽんの頭に似ていることから、この名前がついたとされる。公園の中では、ぜひ太湖沿いの遊歩道を歩きたい。この散歩道は緑に溢れ、夏にはハスの花が美しい。ここから湖に浮かぶいくつかの島と太湖の風景をゆっくりと楽しむことができる。無錫の町がどんなに変化していこうとも、この風景は昔からずっと変わらないままなのだろう。

公園の名所が彫られた石碑

夏にはピンクのハスの花が、公園に彩りを添える

昔の日本を思い出す 惠山古街

無錫は、1987年に恩形大作さんが歌って日本で大ヒットした『無錫旅情』のモデルとなった街でもある。「上海蘇州と汽車に乗り　太湖のほとり無錫の街へ」と旅情たっぷりに歌い上げ、この地を一躍有名にした。しかしながら今では、街の中心地には日本の秋葉原のような電気街やヤオハンなどのデパートが建ち並ぶ。街中どこを探しても「旅情」という言葉は見つからない。

残念に思っていたところ、高層ビルの陰ちまぶ歩む駅からほんの少し離れた街の背後にそびえ立つ惠山と惠山のふもとに、『無錫旅情』の世界は残されていた。油断すると、車で通りすぎてしまうくらい目立たない入り口だが、ここには地元の人々の昔からの生活が今もそのまま残されている。道動の車で混雑する中心地の道路とは対照的に、レンガが崩れ落ちた倦眠の情で老人がのんびりとお茶を飲みながら新聞を読んでいたり、トランプゲームをしていたりする。路地裏に一歩足を踏み入れると、人が、人通るので精一杯なくらい狭いところに、色鮮やかな野菜が並ぶ市場が開かれている。あんなに賑びた入り口が嘘のように、どんどんと奥にまで路地はつながっている。『無錫旅情』が、異国のことを歌いながらもやはりどこか懐かしい日本の香りがするのは、昔の日本の姿とこの惠山古街が重なるからだろうか。

庭園的な惠山古街、二胡の音色に癒しを求める人々も

惠山古街の入り口

昔から変わらぬ素朴な風情が魅力

静かな入り口とは対照的な賑わいの市場の通り

街の中心地を流れる3000年来の古運河

無錫の中心に位置する南禅寺。宋の時代に完成した禅宗の寺だが、それ以上に面白いのが南厚寺前の商店街だ。若者も集まる賑やかな一角で、特に日曜の昼になると広場に屋台も出てくる。日本の浅草のような場所だ。

夜になってこの一角がライトアップされた後に、この南禅寺前から古運河めぐりをするのもおすすめ。この古運河は3000年前に造られた。そのおかげで麻や絹の流通が盛んになり、この街は商業の街として発展してきた。今は賑やかな南禅寺の門前町の陰に隠れて静かに流れているだけだが、遥か昔からこの街を支えてきた陸の功労者なのである。昔は、この運河沿いに家を建てて船で移動していたそうだ。淡い光にぼんやりと浮かび上がる古い家並みは、とても幻想的で無錫の新しい顔を見せてくれる。

夜風みが運河に映る光景は幻想的だ

街の中心地を流れる古運河。夜にライトアップされると幻想的な光景が浮かびあがる

南禅寺の前から古運河へ

運河にかかる橋の上から見た夜景

運河沿いの夜景

無錫の子心が創造する表情

●中国専棚

匠の技、泥人形

無錫の工芸品といえば、泥人形だ。惠山のふもとを1メートルほど掘ると、粘土が出てくる。これをまず機械でこねて四角くし、その後は人の手によってひとつひとつ作られる。泥人形は、焼かずに1週間ほど乾かしてから絵付けをする。泥人形の多くは、歴史上の人物をテーマにしている。工房では、100名ほどの職人が泥人形を作っているが、そのなかでも名人と呼ばれる人は4名しかいない。そのうちのひとりは無形文化財にも登録されており、万博でも金賞をとったほどの実力の持ち主だ。とくに彩り人の作品は、本当に表情が豊かで、今にも動き出しそうなくらい躍動感に満ちている。

宜興

陶器の都を訪ねて いぶし銀の技が光る伝統の茶壺

名も知らぬ職人が作る宜興の陶器

名人館の展示品が並ぶ宜興陶器博物館

蘇州から新しくできた高速道路を走って約2時間、太湖の西にある宜興の町。ここは、紫砂陶器のふるさとだ。この陶器の原料となる紫砂泥は、宜興の近くにある黄龍山で掘れ、五色土や宜興土とも呼ばれる。紫や紅、緑などの色の成分が含まれているが、焼き上がりは明るい茶色などの土の色になるのが特徴だ。採掘された土の千分の一ほどの紫砂泥が茶壺（中国では急須を茶壺と呼ぶ）のために使われ、残りは植木鉢や壁に使われる。今でも紫砂泥の採掘は行われているが、非常に量が少なく貴重なものなので、今後ますます価値が上がっていくだろうといわれている。

使えば使うほど手になじむ

宜興の道を走ると、両側には焼き物の店が隙ち並び、その横に植木鉢や壁が乱雑に山積みされている。車を降りて、街角の家をのぞいてみると、今でもひとつひとつ手作業で作られていた。そのなかでも、やはり茶壺は日本人にもなじみが深く人気がある。茶壺は日本でいう急須だが、茶器と一言でいっても、シンプルなデザインのもの、絵をかたどった取っ手のもの、茶壺全体に模様があしらわれたものなど、実に多彩である。しかし、どの宜興茶壺でも変わらないのは「使えば使うほど手になじむ」ということ。最初はつるつるしているが、何年何十年と使っていくうちに、だんだんと色が落ち着いてくる。そうすると、不思議なことにお茶のうまみも引き出してくれる。そこには、職人たちの熟練の技とこだわりがつまっていて、機械ではなく人の手によって作られたからこそなのだろう。

宜興茶器は、このように家庭で日常的に使われている茶壺だけではなく、芸術作品としての評価も高い。町の中心にある中国宜興陶器博物館では、名人によって明代や清代に作られた作品を中心に、様々な様式の茶壺が展示されている。

街のいたるところに見られるレンガ造りの煙突

太湖の源流ここにあり

宜興の町から西に約1時間のところに竹海と呼ばれる場所がある。去年、ここまでの道路を舗装したため、新しい宜興の観光地として人気を集めている。ここでは、山一面に竹が植わっており、その名が示すとおり海のようにどこまでも続いている。用意されている電気自動車で走ってもいいし、乗ってるともなく続く竹海の遊歩道をのんびりと歩いていくのもいい。そのまま奥まで進んでいくと、太湖の源流（海抜260メートル）にたどり着く。このほんの小さな泉から湧き出る水が、長い時間をかけてあの海のように広い太湖に流れつくのだ。

山深くいろどる竹海。その中から湧出れた太湖の源流

南京

二千五百年の歴史を誇る明朝の都

中華門は南京を代表するみどころの一つ

明の栄華を今に伝える「城壁の古都」

上海から新幹線で西へ約2時間、長江の東に接する南京は江蘇省の省都であり、江南の政治・経済の中心地だ。その歴史は古く、2500年前の春秋時代にさかのぼる。

紀元前472年、越の王・勾践がこの地に都を築いたのがこの街の起源となり、3世紀に入ると、三国志で知られる呉の孫権が再び都を置いた。以後、東晋時代から南北朝時代、南斉から明代、中華民国に至るまで10の王朝と政権の都として栄えてきた。

北京、西安、洛陽と並び「中国四大古都」の一つに数えられるこの街で、最も印象的なのが、街を取り囲む堅牢な城壁だ。

14世紀、江南を統一した朱元璋はこの地で明朝を興し、1368年に初代皇帝・洪武帝に即位した。

朱元璋は幼少からの「高い壁を築いた方がいい」という提案を受け、城壁の工事に着工。21年の歳月をかけ、1386年に街を取り囲む城壁が完成した。その一部は、市街地時代に築かれたものをそのまま利用し、拡張したという。城壁の全長は35.276キロに及び、高さは14メートルから21メートルの間、幅も高い部分は25メートルに達する。

ただし、西安などで見られるような、かっちりとした長方形や正方形ではない。街の東に広がる玄武湖をふちどり、その南にそびえる紫金山（鍾山）の稜線をなぞり、時には少しジグザグに、時にはゆるやかな曲線を描きながら、不定形に街を囲んでいる。山と湖に囲まれた地形を生かして、この城壁が造られたことがわかる。

今もその3分の2以上が、街の中に残っている。これだけの規模の城壁が当時の姿をとどめているのは、中国国内でも極めて珍しく、一見の価値がある。

中華門の上から南京の新旧街を眺む

解放門の上の雑草に覆われた石、城壁

南京を代表する見どころ 威風堂々の中華門

明代には、城壁に沿って13の城門が築かれた。今はそのうちの5つが残されており、南京を代表する見どころが、造られた当時の姿をそのままとどめる中華門だ。

この門は南斉時代の都の南門を再建したもので、明代には聚宝門と呼ばれていたが、1931年に現在の名前に改められた。門の正面に掲げられた「中華門」の文字は、当時、南京を拠点とする南京国民政府の主席だった蔣介石の手によるものだ。

門というより強固な城郭といった印象で、幅は東西118.5メートル、南北128.4メートル、高さは20.45メートルに及ぶ。清代に改修され、600年経った現在もほぼ完璧な状態で、南京の街に鎮座し続けている。

中華門の内部には4つの門が通なっており、それぞれに上下に複雑する「千斤閘門」がある。敵兵が侵入すると、この閘門が降りてきて退路を断ち、ひそんでいた兵士達が捕えるという仕組みだ。27ヶ所の藏兵洞もあり、戦の時には3000人の兵士がここに控え、50万キロの食料を備蓄していたという。巧みな設計とその堅牢な美しさは、見る者を圧倒する。

城壁に積み上げられた石と石をつないでいるのは、もち米の汁と石灰に桐油を混ぜたもの。手でふれてみると、セメントのようで実にしっかりとしている。非常に素朴でシンプルな材料が、今も城壁を堅固に支えていることに、改めて驚かされる。

門の脇にはなだらかな階段が設けられ、城壁の上まで登ることができる。階段の脇に設けられた幅広い坂道は、荷物を積んだ馬が城壁の上まで登れるように設置されたもの。馬は馬に乗って、この坂道を登っていった。ここをかつて明代の兵士や馬達も通ったのだと思うと感慨深い。城壁の上からは、周辺の庶民的な町並みを眺めることができる。

近代的な中の風景と歴史的な城壁がしっくり調和

南京略年表	
BC472	春秋時代　越が呉を破り越城を築く
BC333	戦国時代　楚が越を滅ぼし金陵と名付ける
229	呉の孫権が南京（建業）を都とする
317	東晋が南京（建康）を都とする
420～589	南朝（宋、斉、梁、陳）が南京（建康）を都とする
937	五代十国時代、南唐が南京（金陵）を都とする
1368	明の朱元璋（洪武帝）が中国を統一。南京（応天府）を都とする
1421	明の永楽帝が北京に遷都
1842	アヘン戦争終結。イギリスと清の間で南京条約締結
1853	太平天国が南京（天京）を都とする
1858	アロー戦争終結。天津条約締結　南京、揚江など10港が開港
1912	孫文が南京で中華民国建国を宣言。首都を南京に定める
1928	蔣介石が南京国民政府を樹立
1949	中華人民共和国建国
1953	江蘇省発足　省都を南京に定める

城壁のてっぺんまで、長くなだらかな階段。両脇は緑が豊かな遊歩道になっている

解放門から城壁に登り眼下に玄武湖を一望

中華門とは違った角度から、城壁の眺めを楽しめるのが南の東側、玄武湖のほとりにある解放門だ。

20世紀初めから半ばにかけて、市内の交通をスムーズにするため、城壁にいくつもの門が新設された。解放門もその一つで、1952年に造られた。門のそばの城壁の中には南京明城垣史博物館があり、城壁の歴史に関する展示を行なっている。

解放門から玄武湖に延びる城壁は、幅がゆったりと広く、一番上が遊歩道のようになっている。門のそばにある階段を登れば、眼下一面に湖が広がる。開放的な眺めを楽しみながら、城壁の上をめんびり散歩するのもいい。

玄武湖の反対側に目をやれば、鶏鳴寺の仏塔だ。高さ約40メートルの山の上に建つこの寺は、東晋時代に創建された1500年以上の歴史を誇る古刹。境内に建つ七層の仏塔は高さ44メートルに及び、城壁と玄武湖を望むもう一つの絶景ポイントとして知られている。

城壁門の上から玄武湖を眺め、城壁の上に広く見える遊歩道もあくのんびり楽しい

解放門と城壁。鶏鳴寺の仏塔が印象に残る

朱元璋の野望が現代に甦る 閱江楼

MAP 28ページ❶

長江のほとりに、「獅子山」という高さ78メートルの小高い山がある。ここは、朱元璋が1360年に敵の側近を打ち破った記念すべき場所。朱元璋は虎踞山と呼ばれていた山の名を獅子山と改め、頂上に壮大な楼閣を築く計画を立てた。ほどなく建設がはじまったが、半ばにして中断された。

しかし、600年以上の時を経てこの計画が再び甦る。それが、2001年に獅子山の頂上に建てられた高さ52メートル、7層の「閱江楼」だ。明朝の風情を再現した鮮やかな色彩が印象的なこの楼閣は、南京の新たな観光名所として親しまれている。45メートルの最上階までエレベーターで直行すれば、中国最大の長江大橋と、雄大な長江の流れを眼下に望むことができる。

長がつくられ、明清時代には文人墨客が集まり、大いに栄えた。現在も、河沿いに延びる貢院西街の南端には、たくさんの飲食店が集まっている。

中に多いのが、点心や麺類などの軽食「小吃」の店。寄芳園、魁光閣、永利園といったお店がよく知られている。夫子廟・書店では、200種類以上ものの小吃が食べられると言われる。飲茶の合間にいろいろな店をはしごして、食べ比べるのも楽しみの一つだ。

●中国専門

知られざる銘茶「南京雨花茶」

中国緑茶の名産地はいろいろあるが、意外と知られていないのが、「南京雨花茶」という緑茶。中山陵の近辺をはじめ、南京近郊で栽培されており、中国十大銘茶の一つに数えられる。

松葉のように細くよった茶葉が特徴で、毎年4月下旬に摘み取られた3センチほどの新芽のみを使用している。そのため高温の湯で淹れても渋味はほとんどなく、さわやかな香気と甘味が楽しめる。若々しいグリーンの水色も目にすがすがしい。

夫子廟の文德橋のそばにある天福銘茶など、市内のお茶専門店や土産物店で買うことができる。

秦淮河沿いの通りは賑やかな店も出て賑やか

大成殿はいつも多くの人々で賑わっている

夜になると秦淮河一帯は華やかにライトアップされる

昼も夜も楽しめる そぞろ歩き

夫子廟

MAP 23ページ

長は美しくライトアップされた武廟の入口。中に孔子像が立っている

孔子を奉る宋代の廟 周囲は賑やかな繁華街

南京の街の南部、中華門の北側にある「夫子廟」と呼ばれる一角は、この街を代表する賑やかな繁華街。上海の豫園や、東京の浅草を思わせる庶民的な茶館気で、ぶらぶらと散策するのが楽しい場所だ。

名前の由来は、この地区の一角に建つ古代の思想家、孔子を祭った「夫子廟」だ。宋代の1034年に創建され、「孔夫子」という孔子の尊称にちなんでこの名がつけられた。1937年に日本軍によって破壊されたが、1984年に再び修復された。本殿の大成殿には孔子の像が建っている。

目抜き通りの貢院西街は、終日が歩行者天国。洋服店や土産物店、雑貨店などが多く並び、軒の路地にも小さな店がいっぱい。昼はもちろん、平日も夜遅くまで賑わう。貢院西街の東側に建つ江南貢院は、南宋の1158年に造られた科挙の試験場。清代には国家の試験場が2万614室に達したという。現在は科挙に関する博物館となっている。

秦淮河の眺めを楽しみ 名物の「小吃」に舌鼓

貢院西街を南に進むと、民江の支流にあたる秦淮河に突き当たる。夜になるとこの近辺は華やかにライトアップされ、文德橋から眺める夜景は格別に美しい。遊覧船も営業しており、昼夜ともにクルージングが楽しめる。

八朝時代、秦淮河のほとりには多くの酒

●中国専門

ユニークな南京名物「雨花石」

南京名物として地元でよく知られているのが、雨花石と呼ばれる半透明の美しい石。石英から変化したメノウの一種で、南京の近郊でのみ採掘されるというユニークな石だ。

かつて南京郊外の雨花台付近で多く産出されたことから、この名前がついた。色は赤やピンク、黄色やグレーなどさまざま。縞模様やマーブル風など、表面の柄もバラエティに富んでいる。

秦淮河の近辺の土産物屋に売られており、手軽に買えるものから高価なものまで価格もさまざま。磨き上げた原石はもちろん、アクセサリーや置物に加工したものも各種揃う。好みの色や模様を選んで、旅の思い出に持ち帰りたい。

緑に抱かれ二人の偉人が眠る

中山陵と明孝陵

MAP 28ページ&60

ブラタナス並木が美しい緑陵の陵山路

南京で、城壁と並び印象的なのが、街に流れる緑の豊かさだ。

四季の中国はブラタナスの並木が一層美しく輝く

迫りを歩けば、至るところでブラタナスやヒマラヤ杉などの街路樹が、覆うように枝を伸ばし、涼しげな陰を作り出している。防空壕の40%以上を占めるという緑化率は、南京市民の自慢の一つだ。中国でも屈指の緑豊かな都市であることから、「緑の都」とも呼ばれている。

中でも特に美しいのが、街の東にある紫金山へ延く陵山路の並木道だ。高く伸びたブラタナスが両側に連なり、まさに緑のトンネルと呼ぶにふさわしい。4月から5月の新緑の時期は、新緑がみずみずしく輝き、目にしみるような美しさを見せてくれる。

「革命の父」孫文の墓 街の絶景を望む中山陵へ

ブラタナスの街路樹を眺めながら、陵山路を登っていくと、紫金山（鐘山）の南側のふもとに至る。この山は、南京の歴史で重要な役割を果した2人の人物が眠る場所として知られる。

その一つが、「中国革命の父」と呼ばれる孫文が眠る中山陵だ。孫文は1911年に辛亥革命を率いて、約270年続いた清王朝を倒し、中華民国の臨時総統に就任。その後、「革命未だならず」という言葉を遺して、1925年に北京で逝去した。

中山陵は1926年から建造が開始され、完成した1929年、北京から運ばれた孫文の遺体が埋葬された。陵の広さは約8万平方メートルに及ぶ。

「博愛」と孫文自身の手によって書かれた金文字が掲げられた牌坊をくぐると、さらに陵門があり、その先には長く、広大な階段が広がっている。階段の頂上に建つのが、孫文の眠る祭堂だ。厳かなコバルトブルーの瑠璃と白い壁は、中華民国の国旗「青天白日」を象徴している。

階段の数は393段に及び、10の踊り場が設けられている。牌坊から祭堂までの距離は700メートル、高低差は70メートルに及ぶ。下から見ると、これを上まで登るのかと一瞬ひるむが、一歩一歩進みながら踊り場で振り返ると、少しずつ視界が広がり、南京の街が見えてくる。

そしてようやく祭堂に到着。中央には白い大理石で造られた大きな孫文の座像があり、その奥に置かれた白大理石の棺の下に、孫文は眠っている。

この祭堂の前からの眺望は、素晴らしいの一言に尽きる。見渡す限り広がる緑の向こうに南京の街が一望でき、まさにここは緑の街だと実感する。長い階段を登った疲れも、思わず吹き飛ぶ絶景だ。

朱元璋の陵墓・明孝陵 150年を経て甦った明楼

中山陵の南西には、1398年に71歳で逝去した明朝の初代皇帝、朱元璋の眠る明孝陵がある。

朱元璋が存命中の1381年に建陵が開始され、30年以上の歳月をかけて1413年に完成した。その広さは周囲22.5キロに及び、明・清王朝の皇帝墓群の一つとして、2003年にユネスコの世界遺産に登録されている。

長い年月を経て、多くの部分が破壊されたが、600年前の姿をそのままとどめているのが、入口手前にかかる金水橋。3つ並んだアーチ型の橋は、真ん中が皇帝用、両側の橋は家臣用と分けられている。

この橋を渡るとその先に、鮮やかな黄色の屋根を載せた朱色に塗られた楼が見える。ここが陵墓の入口となる文武方門だ。

文武方門から歩を進めていくと、一番奥に残っているのが「明楼」だ。150年前に破壊された楼閣を再建したもので、2009年7月に完成した。明代の建築を再現し、黄色の屋根をはじめ、鮮やかな彩色が施された美しい建物だ。明孝陵の最も新しい見どころとして、注目されている。中の天井絵にも明代の画法が用いられ、皇帝の地位を象徴する五つの爪を持つ龍や牡丹などが描かれている。

もう一つの見どころが、文武方門の外側に延びる「神道」。陵墓へと続く約13キロの参道だ。両側にラクダ、ゾウ、馬など6種類の動物の立像と巡像が、それぞれ1対ずつ向かい合って並んでいる。丸みを帯びた姿はどこかユニークで可愛らしい。

高さ約6.5メートルのこれらの石像は、600年前、明代から残る貴重な遺産だ。秋は参道沿いの並木が黄金色に染まり、特に美しい季節として知られる。

明孝陵のすぐそばにある梅花山は、梅の名所として有名だ。2月から3月にかけて、約300種3万本以上の梅が咲き誇る。花の季節に合わせて梅祭りが開かれ、多くの人々で賑わう。

高さ約9メートルの四方碑。亀の台座の上に朱元璋の功績を記した石碑がある

陵墓へ至る神道には、ラクダやゾウなど動物たちの像が並ぶ

2009年7月に修復された新たな見どころ、明楼

墓室からあふれるような緑に囲まれる深夜の街を望む

陵上に見えるのが孫文が眠る祭堂。広大な階段をひたすら登って

中山陵の入口となる牌坊。傾まに「博愛」の2文字が掲げられている

42万件もの収蔵品を誇る

南京博物院

MAP 23ページ⑥

収蔵品の数、質の高さは北京の故宮博物院に匹敵

明孝陵のそば、中山門の北に建つ南京博物院は、中国で最も早い時期に設立された博物館の一つだ。

南京に首都が置かれていた中華民国時代の1933年、国立中央博物院として建設計画がスタート。戦争による工事の中断を経て、1950年に南京博物院としてオープンした。

中国全土に2300以上ある博物館の中でも、特に重要とされる国家一級博物館の一つである。

どっしりとした風格の南京博物院の外観

収蔵品は石器時代から明清時代の文物まで、42万件にのぼる。最も豪華な国家一級クラスの文物は2000件にのぼり、そこには新石器時代の「玉虫龍」や前漢時代の「金縷」など国宝級の文物も含まれる。

中国国内で「博物院」と名づけられた博物館は限られているが、中でも「南京博物院は収蔵品の質量ともに中国最新のレベル」北京の故宮博物院と双璧をなす存在として知られている。

11のテーマ別展示室でさまざまな企画展を実施

五感を研ぎ澄ませて、正面にかい柱を備えた建物は歴史の伝統的な建築様式を取り入れており、どっしりと風格を漂わせる。

館内は2つのフロアに分かれて、合計11の展示室がある。面積は1階と2階を合わせて1万2600平方メートルに及び、各展示室では常設展だけでなく、随時さまざまなテーマで企画展示を行なっている。

1階の展示室は5つあり、民俗美術、陶磁器、古代青銅器などに分かれている。「古代彩色陶彫館」では、金や宝石を使った古代の美しい装飾品、オブジェが見られる。明清時代の色鮮やかな磁器のコレクションも圧巻だ。

2階の展示室は6つに分かれ、玉器や漆器、絵画、衣装や刺繍などが展示されている。清のコレクションも豊富で、精巧な彫刻が施された玉器も見どころの一つ。さまざまな時代の遺品を自分に最適なことができる。

南京博物院の秘宝 知られざる南遷文物

満州事変から2年後の1933年、戦火を逃れるため、北京の故宮博物院からきわめて貴重な文物が運び出された。それは、中国歴代の富豪が集めていた富豪文物と呼ばれる品々。収集は12世紀の北宋時代にはじまったとされ、清代には膨大な数となっていた。

文物は約2万個の木箱に入れられ、上海と南京に運ばれた。これが「南遷文物」である。1937年に日中戦争が勃発すると、より安全な場所に保管するため、文物は再び南京から運び出される。そして水路や陸路などさまざまなルートを経て西へ向かい、貴陽、重慶や成都などの都市を転々とさまよう。

終戦後の1947年、南遷文物はほぼ完璧な状態でようやく南京に戻った。しかし国民党と共産党の対立が激化し、1948年には国民党によって約3000箱の南遷文物が台湾に運び出された。それらは今、台北の故宮博物院に収蔵されている。

残りの箱の大半は北京に戻されたが、実は今もその一部が南京に残っている。箱の数は明らかになっていないが、南京博物院の地下の収蔵室に厳重に保管されている。残念ながら一般公開は行なっていないが、学者や専門家、特別な企画のツアーなどに限り公開されている。

明清の生活文化を今に伝える新名所

甘家大院

MAP 23ページ⑤

南京の名家の邸宅を民俗博物館として公開

中山南路の南側、西に入る路地沿いに2007年、南京の新しい見どころがオープンした。明清時代の南京を代表する名家として知られる甘氏の大邸宅「甘家大院」だ。明清時代の生活文化を展示する博物館として、修復により甦らせたもので、南京市民俗博物館とも呼ばれている。

路地に沿って長く続く白い壁に、ぽつんとある入口は目立たず、一見そっけないほどだが、中に入ると、驚くほど多くの部屋が、無数の中庭をはさんで連なっている。建築面積は「6000平方メートルに及び、部屋数は「九十九間半」と称されるが、実際はそれをはるかにしのぐ328室。公開されているのはその一部だが、それでも十分広い。

各部屋には、家族が集まる居間や新婚夫婦の寝室、厨房、邸宅内に甘氏が設けた私塾などが再現されている。当時使われていた調度品や生活用品が置かれ、当時の暮らしを身近に感じることができる。壁の欄干の精巧な彫刻など、建築の美しさも見どころだ。

高層建築に囲まれた中庭には10万冊収蔵の書庫も 瀟遠様

10万冊以上の書物を収蔵していた洋風書庫。当時に元の姿が復元された

精巧な家の飾かし職工や調度品なども見どころの一つ

甘家大院の庭園は、かなり広い庭園になっている。池やあずまやを配し、しっとりした風情を漂わせるが、木々の向こうには高層ビルが建ち並び、そのギャップが面白い。

庭の一角に建つ瀟遠楼は、清代の1832年に造られた書庫。甘氏は十万冊以上の蔵書をここに保存していた。故人が所有する書庫としては、中国でも屈指の大きさだ。その後、蔵書は南京図書館に寄贈されたが、その中には国宝級の古書もあったという。建物は完成してわずか21年後に戦争によって破壊されたが、甘家大院がオープンするのに合わせ、元の姿が忠実に復元された。

演劇など文化に造詣が深かった甘氏は、邸宅の中に舞台をしつらえた小ホールをつくり、親しい人々を集めて京劇などの演劇を楽しんだ。その小ホールは「老茶館」として今も残っており、お茶を飲みながら休憩することができる。

北京紫禁城の九千九百九十九間半、曲阜「孔府」の九百九十九間半にほぼかって、九十九間半の部屋を誇るというが、実際はもっとある。現在は南京の民俗博物館となっており、往時の南京の暮らしぶりを知ることができる。代々、歌舞音曲にも通じ、親交の厚かった京劇俳優、梅蘭芳もここで公演している。

大運河と町

江

蘇省北西部に位置する淮安市（→38ページ）。長江、黄河に次ぐ中国一大河川のひとつ淮河と京杭大運河が合流し、明清代より水運によって発展してきた町である。清代中頃には、50万人ものの人口があり、町は大いに栄えていたという。河岸のように残り返される淮河の氾濫にも悩まされたようで、淮安という町の名前は、淮河を安んじる、との人々の願いに由来としている。

この町の南にあるダム施設から大運河を眺めていると、石炭や砂利など様々な物資を積んだ船がさかんに行き交う。遠目に見ると動いているのかどうか分からないほどのゆっくりとしたスピードだ。中には、洗い物をしたり、こちらを眺めたりしながら、こちらを眺めたりしながら、ゆっくりと進んでいる船もある。聞けば、1週間で2週間、長い時には1か月以上も船に乗り込んで、移動しながら生活するのだという。

そうした営みは古くからたえず変わることなく続けられてきたに違いない。そして運河沿いには町が生まれ、文明が栄えた。人々のくらしは運河とともに発展してきたのである。

水を制するものが天下を制す

京杭大運河は、北は北京市から天津市、河北省、山東省、江蘇省を経て南は浙江省の杭州市に至る1800キロを南北に縦貫する世界最長の運河である。万里の長城と並ぶ中国古代建設の偉業と言われ、その規模はパナマ運河の20倍、スエズ運河の40倍に相当するというから、この京杭大運河がいかに大工事であったかがわかる。

大運河は春秋時代に着工され戦国時代から秦・漢の時代を経て隋・唐の時代にかけて徐々に延長されるようになる。すなわち、この間、①鎮江（江蘇省）～杭州（浙江省）で江南運河、②揚州（江蘇省）～淮安（江蘇省）～揚州（江蘇省）、③淮安（江蘇省）～洛陽（河南省）～北京の1本の運河が順次建設され、隋の時代にこれらの運河をつなぎ全行程が開通したとされている。この時、煬帝は豪華な船に美女を多く乗せ酒宴を催しながら江南地方へ巡行したというから、いかに堕落を心得ていたかが分かる。

それにしても古代の工たちは何故こうも大運河の建設に情熱を傾けたのか。中国には黄河、淮河、長江という三大河川があり、特に黄河は古くから氾濫を繰り返しては人々の生活を脅かしてきた。この水害を利用して、黄河の水運を除して南船北馬というが、こうした不便を解消しようとして運河の建設がさかんに進められたのである。

もう一つの利用の目的もあったようだ。隋の煬帝は洛陽と北京間に水路を開いて、そこには、古代から運輸と縁く歴史があり、人々の暮らしが息づいている。橋のたもとに立ってこの大運河のゆったりとした流れを眺めれば、運河文明、とも呼ぶべき歴史ロマンが蘇り、誰しも詩情を感じずにはいられない。

昔より運河のほとりに町が生まれ、人々の暮らしが栄えた。そして今、絶えることない運河の流れは、詩情豊かに旅人の心に迫ってくるのだ。

暮れたりした際の流れと運河の清の、詩情を感じずにはいられない（淮安市）

揚州から運河沿いに南方へ向かう京杭運河大橋と書る

江南地方は水の郷　輝ける京杭大運河の輝き

運河の都、江蘇省

大運河とともに多くの町が生まれた。ここ江蘇省には大運河の3分の2が流れ、その運河沿いには蘇州・無錫・淮安・揚州・鎮江・常州・徐州・といった町々があり、大いに栄えている。江蘇省は大運河とともにある、といってもあながちではない。

近現代になると、鉄道や航空の発達とともに、水運としての大運河の役割は徐々に

大運河の歴史

京杭大運河は、世界最長の大運河。北は北京市から天津市、河北省、山東省、江蘇省を経て南は浙江省の杭州市に至るまでその総延長距離は1800キロに及ぶ。中国で唯一南北に縦貫する運河でもあり、海河、黄河、淮河、長江、錢塘江の中国5大水系に接している。紀元前5世紀頃の春秋時代に着工されたとされ、2500年に及ぶ大運河の歴史が始まる。

■鎮江～杭州
春秋時代。呉の王、夫差によって鎮江（江蘇省）～杭州（浙江省）間の運河が掘削され開通。この運河は「邗溝」と呼ばれ、のちの江南運河となった。

■洛陽～淮安
大運河建設が本格化する時代。紀元605年、隋の煬帝は洛陽（河南省）～淮安（江蘇省）までの運河建設を命令、それによって造られた運河は「通済水路」と呼ばれた。黄河を経由して長安と洛陽が江南とつながった。

■淮安～揚州
その後、淮安～揚州（江蘇省）まで延長され、これにより洛陽から杭州までの水路が完成したことになり、水運の便はさらに良くなった。

■洛陽～北京
隋の煬帝はさらに、洛陽～北京を開削。「永済水路」と呼ばれるこの運河は、他の運河とは異なり、当時、朝鮮半島で強大な勢力を誇っていた高句麗征伐のための備えとして建設された。これにより、4本の運河が一つとなり、南北に走る大運河が完成した。

現在、この京杭大運河を世界文化遺産に登録しようと、沿線33都市が共同して準備を進めている。2014年に申請する予定だという。

徐州

項羽と劉邦の世界が鮮やかに蘇る漢文化のふるさと

江蘇省とはえば、蘇州周辺の水郷古鎮でよく知られるが、歴史ある古都として興彩を放つのがここ徐州。江蘇省の最北西部にあって、人口約925万人(市街地は180万人)、重工業や食品加工などの産業で発展する大都市だが、その歴史は古く徐州が中国の歴史の表舞台に登場するのは紀元前2世紀頃の古代に遡る。

この時代、徐州は彭城と呼ばれていた。この辺りは昔から平城の中にありながら四方を小高い山や丘陵に取り囲まれた要害の地で、歴代の軍勢がこの地の覇権を巡って争い、また、各地より多くの商人が集まり大いに栄えていた。

そして、中国の古代史に名をとどめる2人の英雄が秦朝の末期にこの彭城から動乱の世に出る。その名は項羽と劉邦。項羽は現在の徐州市の南に接する宿遷市の出身、劉邦は徐州市郊外の豊県で生まれ、隣の沛県で育っている。

紀元前205年、項羽と劉邦は連合して秦を滅ぼすが、その後の興亡の人生はくっきりと明暗を分ける。少し歴史を駆け足で辿って、秦を倒した項羽は故郷に近い彭城に都を置いて、西楚覇王と称して一時君臨するが、漢王として利の地に封じられた劉邦が不満を持つ諸侯とともに反旗を翻し、雌雄を決する戦いが始まる。この楚漢戦争と呼ばれる戦いは、垓下の自害をもって終わり、勝利した劉邦が統一王朝漢を打ち立てることとなる。

戦後の戦い(垓下の戦い)で四面楚歌に陥った項羽が、愛妾の虞美人に「虞や虞や、汝をいかんせん」と歌う悲恋の物語は京劇の演目別題でつとに有名だ。

中国を統一した劉邦は長安に都を置いたが、故郷を一族の封地とした。この結果、現在の徐州には400年にわたる前漢後漢の時代を通じて漢代の素晴らしい史跡が数多く残り、漢文化のふるさとしての地位を不動のものとしているのである。

現代の中国において政治、経済、社会の枢要を担うのは漢民族であり、漢文化である。前漢後漢を通じて400年に及ぶ長い漢の時代の精神や文化が現在の中国の原型をなしているのは想像に難くない。徐州はそうした漢の文化が色濃く残る地であり、中国のふるさとといってもあながち的はずれでもないであろう。

四季の花々で彩られる風光明媚な雲龍湖風景区

哀愁豊かな地下軍団、漢兵馬俑

1984年のこと、獅子山という山の近くでれんがを作るために土を掘っていた地元の工人が偶然に夥しい数の兵馬俑を発見した。それはどれも50センチほどの土でできた小さな俑で、色彩も施されていた。獅子山楚王陵(第三代楚王・劉戊の陵墓)。この時代、彭城は漢の封国楚の都城であったことから、歴代の王は楚王と呼ばれる)から300メートルほどの場所で、発掘された4000点以上にも上る兵馬俑は楚王の副葬品と見られている。現在は発掘現場に博物館が作られ、1号坑から3号坑が公開されている。

西安郊外にある秦の兵馬俑とは異なり、歩兵や騎兵、戦車を備えた土製の俑は一体50センチほどの小さなもの。博物館ではガラス越しにしか見ることができないが、一体一体姿かたちや表情も違う俑が列を寄せ合うようにしてズラリと並んでいる。その陣容は指揮初期の楚王の実戦軍隊の生きなしとされる。

厳しい顔つきのものもいれば、にこやかなものもいる。秦の兵馬俑のように見る者を圧倒するようなものではないが、漢代の兵士の様子や感情までもがうかがい知れるようで面白い。

漢兵馬俑。一体50センチほどの小さなものだが、俑師が魂かで古代の戦士の息づかいが聞こえてくるようだ

水中兵馬俑博物館

兵馬俑が守った獅子山楚王の墓

獅子山楚王陵は、前漢早期の楚王劉戊の陵墓とされる。発掘された文物は金、銀、銅、鉄、玉石、陶など2000点にのぼる。中でも金の玉衣と呼ばれる、玉石を金の糸で縫ち合せてつくられた、いわゆる王の死に装束や、金製の王のベルトのバックルなどの文物が出色だ。これらの出土品は現在、徐州博物館で目にすることができる。

陵墓は石灰岩でできた山の中腹を掘りぬいて造られており、入口を入って細い墓道を100メートルほど進んだところに墓室がある。墓室には、壮観な楚王の肖像もある。

この墓の一つの特徴は、盗掘を防ぐために入口を巨大な石で塞いだこと。一つの重さが6トンもあり、上下に8個づつ積み上げて墓道を塞いだ。石と石の間はコインー枚も通さないほどの精巧さで造られているというから、古代人の土木技術にも驚かされる。

獅子山楚王陵の入口。中央の墓道を100メートルほど進むと墓室があり、玉棺が置かれている

中国専稿

王の死に装束。金の玉衣と金製の王のベルトのバックル。徐州博物館で目にすることができる

徐州博物館

風光明媚な雲龍山の北麓にあり、亀山漢墓、獅子山楚王陵などで発掘された漢代の文物を展示している。中でも必見の価値があるのが、王の玉衣。いわゆる王の死に装束で、小さな玉石を金や銀の糸で綴いで実物大の玉衣を象っている。発掘された時は、金銀の糸だけが抜き取られた玉石はバラバラの状態だったが、現在、修復され展示されている。

再開して商店街にしたもので、風情はそがれるが、街中の豊の浅水とは無縁で情緒豊の店先や露天を冷やかしながら静かな雰囲気を楽しむことができる。

民族博物館もあって、ここは正真正銘の明清時代の民家を利用して博物館にしたもの。古い家屋には一般の部屋があり、明清時代の独特様式や当時の結婚、育児の風習を知ることのできる部屋や地方劇が演じられる舞台、民芸品の展示室などがあり、徐州の風俗習慣に触れることができる。

二龍山民族博物館

中国将棋を楽しむ地元の人々

明清代の家屋を再現した湖畔街

歴史好きの旅人にはたまらない
見所の数々　徐州

●項羽戯馬台●

徐州に残る項羽の唯一の史跡。項羽が閲兵用の台を築いて、歩兵や騎馬兵などの軍事訓練を見ていた場所とされる。門をくぐると正面に精悍な顔つきをした項羽の銅像がある。鴻門の会で酒を酌み交わす項羽と劉邦、四面楚歌に陥った項羽と虞美人悲恋の物語などの場人形のレリーフを見ることができる。

戯馬台にある項羽像

●沛県漢城●

劉邦は徐州市近郊の豊県で生まれ、その隣の沛県で育ったとされる。徐州郊外にあり、車で1時間30分ほどで行ける。劉邦一色と言っても良い街で、街の中心部には歌風台が建ち、周辺には漢城公園、漢街、漢高祖原廟などがある。いわゆる漢風の建築群で構成された公園である。歌風台は劉邦が戦いの帰りに立ち寄り、友人や一族郎党を集め酒宴を催した所で、天下を平定した苦労と喜びを劉邦自らが舞い歌った有名な大風歌碑もある。往時の劉邦の勢いが偲ばれるようだ。

劉邦ゆかりの歌風台

●雲龍湖●

徐州市の南郊にあり、一番の風景区となっている。湖面は豊な水を湛え外周道路を進むと湖畔の柳が風に揺れ、しっとりとした風景を楽しむことができる。春はピンクの桃の花が咲き誇り、柳の緑とのコントラストが美しい。夏には赤い石榴の花が咲き、秋は紅葉が湖畔を彩る。そして冬は雪化粧したような白い梅の花で覆いつくされるそうだ。湖畔には徐州で唯一の5つ星ホテルもあり、四季を通じて観光客が絶えない。

雲龍湖風景区の中でも優雅な美しさを見せる小南湖

古代の地下宮殿にタイムスリップ

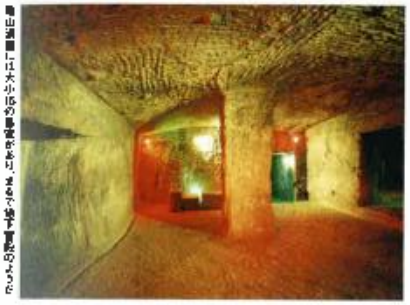
中国の古代においては、死者は冥界の国に行っても今と同じように暮らし続けると信じられ、墓幕を造る際には生きている時と同じように二の部屋から武具、炊事道具に至るまで生活一式をそのまま墓に埋葬した、という。

亀山漢墓は前漢時代の5代目の楚王である劉注夫妻を合葬した古墳とされていて、東西の長さ83メートル、南北は最も広い所で33メートルの幅があり、山全体を掘り抜こして造営した墓である。

50メートルはあろうかと思えるやや湾ってヒンヤリとする暗い墓道を進むと、様々な部屋や庭のような広間が現れる。部屋の数は王の寝室や客間、車馬室、厨室、便所、台所など、大小様々に15室。天井も4～5メートルほどはありそうで、石柱が天井を支える様子はまるで地下宮殿を思わせる。

この亀山漢墓、獅子山楚王陵ともに、それぞれの楚王の生前に造営が始まり数十年の歳月をかけて完成しているという。地下宮殿と思しきその壮大で生活感溢う建築には、古代人の生に対する強い信仰や執念が籠っているようで神秘的ですらある。

無錫の峰代、山全体を掘り抜こして造営された亀山漢墓


亀山漢墓には大小15の墓室があり、まるで地下宮殿のようだ

漢画像石芸術館

漢代の生活の様子が生き生きと

漢代の人々の生活や戦争の様子などを知りたい人は、漢画像石芸術館を訪ねてみるとよい。蘇州の庭園、南京の六朝石刻と並んで江蘇省の三宝ともいう。風光明媚な雲龍湖畔に建てられており、漢代ほぼもちろん所代の画像石が1000点以上収蔵されている。

画像石とは石に彫刻して当時の様子を描いたもので、どれも実に生き生きとして描かれており、2000年以上も前の人々の息遣いが直に聞こえてくるようだ。貴族や役人など高貴な人々が酒宴を楽しむ図があるかと思えば、踊りに興じたり舞を打つ人々など。また庶民の喜怒哀楽や労働の辛さまで伺うことができ、見ていて飽きない。

雲龍湖そばにある漢画像石芸術館。画像石には漢代の様子が生き生きと描かれており、見ていて楽しい

そぞろ歩きが楽しい戸部山古民居街

項羽が歩兵や騎馬兵の軍事訓練を見ていた高台として知られる戯馬台。ここから見下ろすとすぐ下に明清時代の古民居の一角があって雰囲気が美しい。下に降りて歩いてみる。歴史を感じさせる石塀の面をゆっくり下ると、周囲の家々には洗い物が干してあり、今でも住居として使われていることが判る。

残念ながら明清時代の古い家屋はこのほんの一角だけで、徐州でも経済の発展とともに民生改革が猛スピードで進んでおり、風情ある建物は取り壊されてほとんどなくなったという。歩を進めて別の道路を歩むと、視界が開け明清時代の建物のようであるが、やけに新しい家屋が目に飛び込んできた。

この辺りは市の中心部に位置する戸部山民居街である。観光客向けに明清時代の家屋を

明清代の建物がそのまま残る戸部山古民居街

高郵

郵便の駅が残り、大運河のほとりに佇む宿場町

現在は観光用の船が行き交う高郵湖。元から明の時代、郵便船は馬で運ばれていた

江蘇省北西部にある人口40万人ほどの高郵市。町の中を京杭大運河がゆったりと流れ、石炭船や商船が静かに行きかう。そのほとりに高郵正城駅はひっそりと佇んでいた。駅のある一帯は小規模ながら明清代の古びた家屋がそのまま残り、黒い屋根瓦と漆喰で固めた白壁の家並みが続き風情がある。運河の対岸には唐の時代に建立された頭回寺塔がもやに霞んで見える。おそらく当時のままの変わらぬ風景なのであろう。

高郵正城駅。鉄道駅ではない。元から明の時代、郵便を馬で運ぶ郵便の駅があり、ここは当時の名残をとどめる郵便の駅である。高郵正城駅があった東京ー南京ルートは最も重要なルートで、その距離実に1700キロ。当時は沿駅があったが、残っているのは高郵正城駅だけである。現在は郵便博物館として国家レベルの重要文化財に指定されている。

運河のほとりは明の時代に建立された頭回寺塔がもやに霞んでいた

郵便役人の宿泊所だった駐節堂。往時のままの姿をとどめている。

高郵正城駅とマルコポーロ

当時の郵便の駅にはいくつかの役割があった。一つは文字通り郵便局であり、政府命令の伝達物などを馬で運んだ。逆に民間郵便もあったようで、重要な政府命令などは1日400キロを早馬で飛ばしたと言われる。二つめは宿泊所。下には役人を相手にする宿泊所としての役割。三つ目は塩や貴重の積み下ろしの場所、さらに疲労した馬を交換する乗り換えの場所でもあった。

マルコポーロもここを訪れたようで、駅の中に入ると彼の碑がある。マルコポーロは元の時代に同じ江蘇省の揚州で一時期役人として勤めたことがあり、その頃に大運河を船に乗ってこの地にやってきたのかもしれない。碑にはこの地について、町は大きく発展している。生活も豊かである。特に魚が良く獲れ、鶴も多い」などと記されている。当時この地が宿場町として繁栄していた様子がうかがえる。

また駅の中には、役人の接待所も残っている。駐節堂といって、明の洪武帝の1370年前後に建てられたそのままの姿をとどめている。

鼓楼から仕りし川の風景を偲ぶ

駅にある鼓楼に登ってみる。黒い屋根瓦が続く家並みのその向こう100メートルほどのところに大運河が見える。当時は運河に沿って道が延びており、遠くから鳥が近づいてくると鼓楼にある太鼓を叩いて鳥の来着を知らせたという。使者はここで馬を交換し機密保持の点から人間が交代することはなかったと、徐皇もほとほとにまた馬を駆っていったそうだ。

鼓楼から降りて、駅のすぐそばにある南大門街と呼ばれる直線100メートルほどの通りを歩いてみる。両側には小さな商店や民家が並び、子供たちが遊んでいる。今となってはどこにでもある田舎の風景だが、マルコポーロが訪れた頃は、馬のいなないが聞こえ、役人が通りを闊歩する姿やかな宿場町だったに違いない。そんなことを想いながら駅を後にした。

高郵はアヒルの一大産地として知られている。さらに「双黄咸蛋」という黄身が2つある卵で作られた料理も有名だ。
アヒルが卵黄の二つある卵を生む確率は普通は千分の一の確率であるのに対し高郵では十分の一と言われている。その理由は定かでないがユニークな名物料理だ

淮安

南船北馬で賑わった水の都

淮安は京杭大運河のほぼ真ん中に位置し、中国三大河川のひとつ淮河が交わる。古くから揚州、蘇州、杭州と並ぶ「水の都」として栄えてきた。明清代にこの町は中国の治水行政、水運行政の中心地として大いに栄え、清代の中ごろには人口50万人を有する大都市であった。

町の中心部を古い運河が流れその脇に、この地が「南船北馬」の中心地であったことを示す碑がある。当時ここで南から船で来た者は馬に、北から馬で来た者は船に乗り換えそれぞれの目的地に旅立っていった。そうした人々でこの町は大いに賑わっていたに違いない。

町の中心部にはこの地が水運行政の中心地であったことを示す史跡もある。また、淮安という町の名前の由来は、「淮河を安んじる」との人々の願いからつけられたもので、古くから幾年のように繰り返す淮河の氾濫に悩まされていた。町の中心部にある「鎮淮楼」は氾濫を鎮めるために建てられたもので淮安の象徴的存在である。

淮安は南船北馬の中心地。陸は馬と船を乗り換えるようで大いに賑わった

淮河の氾濫を鎮めるために建てられた「鎮淮楼」は淮安の象徴だ

周恩来と西遊記ゆかりの地

淮安は毛沢東とともに現代の中国建設に大きな役割を果たした故周恩来首相の故郷としても知られている。淮安の人々の心の拠り所となっており、町の中心部には「周恩来記念館」があり、周恩来の生涯や人となりを辿ることができる。また首相時代の北京における執務室を再現した「西花厅」も観光客でにぎわっている。

旧市街には生家があり、生家を中心としてこの一帯は「周恩来故居風景区」となっている。明清時代の建築様式で街並みを再現しており、茶屋や商店も多くあり、観光客の格好の散歩エリアだ。規模はさほど大きくないものの、周恩来を偲びながら散歩するのは風情がある。

また、三国志、水滸伝、金瓶梅と並ぶ中国4大小説の一つ、「西遊記」の作者、呉承恩のゆかりの地でもある。呉承恩は政府の役人にはなれず淮安の役人となるが、失意のなかで60代になってから9年の歳月をかけて西遊記を書き上げたとされる。町には呉承恩の旧居もある。

淮安は現代中国建設の立役者、周恩来首相のふるさと。銅像。上と並び（中）、北京における就職者を再建した西花厅。一

河下古鎮。明清時代の街の様子を再現しようと建築が進められている

明清時代の建物を再現した周恩来故居風景区の一角

淡水の魚が美味しい 淮揚料理

水の郷・淮安。中国で4番目に大きい湖で淮河が氾濫してできたとされる淡澤湖をはじめ多くの湖や河川があり、淡水魚をメインに使った料理が美味しいことで中国国内にも広く知られている。「淮揚料理」は淮安が発祥の地で、淡水魚や田うなぎ、すっぽんなどの食材を使った料理が美味しい。この淮揚料理を目当てに訪れる観光客も多いそうだ。

一味違う淮安の田うなぎ料理

揚州

優美な詩情あふれる麗しき都

文化が華麗に花開き多くの文人が愛した地

「煙花三月 揚州に下る」。中国を代表する唐代の詩人、李白の詠んだ詩にこんな一節がある。煙花とは花が一面に咲き誇り、霞が立ったように見えるさまで、色とりどり花にあふれた春の揚州の美しさを表現したものだ。

長江下流の北部に位置し、京杭大運河と交わる場所にある揚州は、2500年の歴史を誇る古都。南北を結ぶ水運の拠点として古くから栄えてきた。明清時代には塩の取引によって繁栄を極め、賑わった市は豊かな文化を生み出す源となり、多くの文人や商家がこの地に魅せられた。

街の中には大小の運河がめぐらされ、今も歴史を感じさせる建物が多く残る。水辺に沿って植えられた柳のたおやかに風に揺れ、いにしえの繁盛な風情を今に伝えている。

花々が咲き柳揺れる瘦西湖は一幅の絵巻さながらの美しさ

時の権力者もまた、揚州の美しさに魅せられた。清の乾隆帝は、北京から何度もこの地に足を運び、滞在したことで知られる。彼がこよなく愛したのが、街の北西部にある瘦西湖だ。

瘦西湖という名は、清代の詩人・汪沆が肥満度として知られる杭州の西湖になぞらえ、細長い湖の形を「痩せた西湖」とうたったことに由来する。美しい緑の中にさまざまな見どころが点在するこの湖は、優美な揚州の魅力を凝縮した景勝地と言えるだろう。

東から西へ、そして南から北へと曲がりくねった湖は、湖というよりぐるりと巡る長い運河といった印象。湖には遊覧船の船着き場がいくつか点在しており、すべて多いて回るにはかなり距離があるので、遊覧船に乗って風景を楽しみつつ、気の向いた場所で降りて散策を楽しみたい。伝統的な中国建築をモチーフに作られた電気モーター式の屋根付き遊覧船がたくさん運航しており、気軽に乗り降りができる。

瘦西湖には南と西、北に大門と呼ばれる3つの入口があり、街の中心部に最も近い南大門からみると、湖の西側に延びているのが長堤春柳だ。約600メートルにわたり、柳と桃の木が湖のほとりに交互に植えられている。緑も草やぎを見せるのは、柳の新芽が芽吹き、桃が満開になる4月。水辺の美しい並木道をのんびり歩くもよし、遊覧船に乗って水上からの眺めを楽しむのもいい。

長堤春柳の北端には、明代に造られた徳園、除園がある。ここから赤い橋下のかわいらしい木造船を漕ぎれば、湖の中央に浮かぶ小さな島、小金山に行くことができる。

小金山から西に向かって、細長い桂橋のようにつき出した突端が釣魚台だ。乾隆帝が瘦西湖を訪れた際、ここで釣りを楽しんだことからこの名がついた。

釣魚台から望む五亭橋と白塔の絶景

釣魚台に立つと、正面に、黄色い屋根のあずまやを五ついただく美しい橋が見える。五亭橋という名のこの橋は、清の時代に塩の取引で富を成した商人が建てたものだ。空から見ると、五つ並んだ屋根が蓮の花のような形に見えることから、蓮花橋とも神はれている。瘦西湖観光のハイライトの一つだ。

その左に白く輝く優美な姿を見せる白塔は、ラマ教の仏塔をかたどったもの。乾隆帝がふともらした「ここに白い塔があるとよいのに」という言葉を受け、一夜で建てられたという伝説が残っている。

五亭橋と白塔を同時に望むことができる釣魚台は、毎年観光客で賑わう人気の場所だ。湖に面して小さなあずまやが建っており、2層の軒に大きな丸窓があいている。中国庭園の「枠景」という手法を用いたもので、一つの窓からは白塔、もう一つの窓からは五亭橋と、それぞれ異なった眺めを、絵を観賞するように楽しむことができる。

五亭橋から西に進むと、もう一つのハイライト、二十四橋がある。唐代の詩人杜牧が、橋の多い揚州を「二十四橋明月夜」とうたったことにちなんで造られた。

二十四橋は、アーチ型の橋や優雅にも曲がった丸曲橋など、形の異なる白い橋が軽く連なっている。全長24メートル、幅は2.4メートル、手すりが24本、上下の石段も24段と、とにかく24という数字にこだわっているのが面白い。

二十四橋のたもとに建つ回春台は、瘦西湖の中でも規模が大きく、常々たる風格の建物だ。前庭には美しく花が咲き乱れ、ここで乾隆帝の凱歌を祝いが行われたとされる。ここから二十四橋を渡り、対岸に聳つ望春楼から湖を眺めるのも、興だ。次から次へ、現るほどに、絵のような風景が広がり、典雅な風情を存分に堪能することができる。

回廊を花に囲られ、鮮やかなグリーンの屋根が圧巻的な雰囲気

瘦西湖のハイライト、五亭橋と白塔を遠景に望む

瘦西湖の観望スポットとして知られる釣魚台

木製の鑑真像が展示している。8世紀に作られ、日本の唐招提寺に置かれている鑑真初生像を模したもので、木はクスノキが用いられ、彩色には揚州工芸の特産品である漆が使われている。

目を閉じて静かに坐禅を組む鑑真像は穏やかな表情を浮かべ、一心に祈りを捧げているようにも見え、黙して何かを考えているようにも見える。そのかたわらに置かれているのは、来日の際に鑑真が乗ってきた船の模型だ。記念堂の入口の前には、唐招提寺から贈られた石灯籠が置かれている。日本と揚州、および中国の深いゆかりと歴史を感じさせる場所と言えるだろう。

「栖霊塔」から揚州の街を一望 文人が集った「平山堂」に憩う

寺の中はかなり広く、ほかにもさまざまな見どころがある。

中でもひと際目立つのが、寺全体を見下ろすように天にそびえる高さ70メートルの九重の塔、栖霊塔だ。最初の塔は仏舎利を収蔵するため、隋の時代に建てられ、多くの詩人たちがその美しさを歌に詠んだが、唐代に入って火事で全焼した。現在の建物は1995年に再建されたものだ。揚州では最も高い建物で、最上階にのぼれば痩西湖はもちろん、市内を広く一望することができる。

塔のそばに建つ臥仏殿には、長さ78メートルの涅槃像が立てられており、そこには日本の僧侶2人が鑑真に来日を懇願する場面が描かれている。その中央に安置されているのは、高さ約2メートル、幅約6メートルの巨大な釈迦牟尼仏の涅槃像だ。

寺の西側に建つ平山堂は、北宋時代の政治家であり、詩人でもあった欧陽修が揚州の知府（現在の知事にあたる）として赴任した際に建てられた。堂の中に座って遠くの山を眺めれば、建物と同じ高さに見えたことから、この名がつけられた。

欧陽修は忙しい公務の合間を縫って、この地域の文人墨客を集めて文学に関する話に興じたり、宴会を催すなど、平山堂は当時の文化人の交流の場として大いに賑わった。堂の入口のすぐそばに蓮池の椅子が置かれており、日中に座ることができる。今では、ここから山々を見ることはできないが、庭の緑が目に清々しい。

寺の最も西側にある西苑は、揚州名園の一つに数えられる庭園の一つだ。池のほとりに建つ赤い柱のあずまやの中には、漢詩を刻んだ石碑が建っている。このあずまやは乾隆御碑亭と呼ばれ、揚州を愛した清の皇帝、乾隆帝の自筆による漢詩を刻んだものだ。

そのそばには乾隆帝の祖父、康熙帝の自筆による漢詩を刻んだ康熙御碑亭もある。

蓮池の椅子がしつらえられた平山堂

乾隆帝の自筆の漢詩が刻まれた乾隆御碑亭

歩き疲れたら、さりげなく歴史を感じさせるこれらのあずまやで足を休め、豊かな緑に囲まれた美しい庭園ながめを楽しみたい。

揚州で最も高い建物、高さ70メートルの栖霊塔

日本と中国のかすがいとなった鑑真和上ゆかりの寺

大明寺

揚州に生まれた鑑真は この寺から日本を目指した

痩西湖の北端に建つのが、揚州を代表するもう一つの観光名所、大明寺だ。中国仏教の一宗派、律宗の寺で、寺の名前は約1600年前、宋の孝武帝の元号、大明時代に建立されたことに由来する。

742年、はるばる海を越えてやってきた二人の日本人僧がこの大明寺を訪れた。中国は唐の時代、日本では奈良時代のことだ。「仏教の規範である戒律を日本に伝えて欲しい」。彼らの願いを聞き入れたのが、揚州に生まれ、その時に大明寺の住職を務めていた高僧、鑑真である。

鑑真はその後、日本への渡航を5回に渡って試みるがことごとく失敗する。故の疲労により、ついには失明するという苦難を乗り越え、12年目に6度目の航海でようやく日本にたどり着き、悲願を果した。

日本で律宗の開祖となった鑑真は、その総本山として奈良に唐招提寺を創建したことで、広く知られている。仏教だけでなく、書道や薬学、建築など幅広い知識を日本に伝え、さまざまな面で日本文化に大きな影響を与えた。そして、祖国に戻ることなく、日本でその一生を終えた。

穏やかな表情の座像が 鎮座する「鑑真記念堂」

大明寺の一角には、彼の功績を称えるために建てられた鑑真記念堂がある。鑑真の遷化1200年を記念して1963年に着工し、10年後の1973年に完成した。ちなみにこの寺の名前は創建されて以来何度も変わったが、最初の名前である大明寺に戻ったのは、1980年に鑑真の像が日本から一時出張りしたのがきっかけだという。

記念堂の中央にはガラスケースがあり、

日を閉じ、思わるような穏やかな表情を浮かべる鑑真像

鑑真像の傍らには鑑真の遺灰を収めた箱が置けられている

大明寺の本殿にあたる大雄宝殿

工芸の匠と名物料理の数々 揚州文化を楽しむ

世界的に有名な炒飯など あっさり塩味の揚州料理

揚州料理と言えば、よく知られているのが揚州炒飯。ぱらりと香ばしく炒めたごはんと卵に、細かく刻んだネギやニンジン、中華ハムなどが彩りを添え、シンプルだが味わい深い一品だ。

そのルーツは隋の時代にさかのぼる。京杭大運河を造った煬帝は、炒めた卵を和かく散らしたごはんが好物だったという。卵が砕いた金のように見えることから「碎金飯」と呼ばれていた。

煬帝が揚州を訪れた時にこの碎金飯が伝わり、やがて肉や野菜などが加えられ、現在の形になったと言われている。今では世界中の中華料理店でよく見られる定番メニューだが、ルーツとなった本場の味をぜひ堪能したい。

このほかの代表的な料理には、押し豆腐の千切りを細ガラスープで煮込んだ「大煮干絲」、ガチョウの肉を塩漬けした「鹽水鴨」などがある。「清蒸獅子頭」は、豚肉を団子にしてスープで長時間煮込んだもので、口に入れると溶けるように柔らかい。揚州の名物料理として知られる。

塩の取引で潤った所とあってか、いずれも塩味を生かした料理が多い。中華料理の中では、かなり淡泊であっさりとしており、日本人の口にもよく合う、海きの来ない味わいだ。

伝統の漆器や切紙細工など 繊細な匠の技を見る

揚州は中国国内でも屈指の、高い工芸技術を誇る街としてよく知られている。中国の要人は外国を訪れる際、贈り物として揚州で作られた工芸品をよく携えていくという。

そうした技術の粋をじっくり見ることができるのが、揚州工芸美術館だ。中でも有名なのが漆器で、その起源は紀元前4世紀までさかのぼる。

揚州の漆器文化は宋と元の時代から盛んになり、明と清の時代に華やかに花開いた。この美術館では、美しい浮き彫りを施した鮮やかな朱赤の花器、きらめく螺鈿を埋め込んだ盆など、長い歴史に支えられた伝統技術を見ることができる。

このほか、精巧な彫刻を施した屏風や、レースのように繊細な切紙細工なども見どころの一つ。1階は広々とした販売スペースになっており、漆器や工芸品などを扱っている。揚州名物の工芸品を、お土産にここで買い求めるのもいいだろう。

こまやかな彩色が施された色彩豊かな揚州漆器

繊細な切紙細工も盛んな揚州の代表的な工芸品の一つ

赤色に輝く螺鈿工が美しい屏風

●中国事情

料理、理髪、足の手入れ 「揚州三把刀」

揚州人を称するのによく使われるのが、「揚州三把刀」という言葉。ここで言う刀とは料理の包丁、髪を切るハサミ、そして足の角質をとる（修脚）ナイフを指す。料理、理髪、そして足の手入れ、昔からこの3つの仕事に秀でた人が多いことを表わした言葉だ。

足の手入れについては、単に角質をとるだけでなく、次第に「足療」と呼ばれる足の按摩やマッサージへと発展した。今では、揚州人はマッサージがうまいということで広く知られ、市内には按摩やマッサージを受けられる店も数多い。伝統の「揚州三把刀」の技術を体験して、旅の疲れを癒してみては？

揚州気の中には熱々の包子 揚州名物「早茶」を楽しむ

香港や広東地方は、午後に点心を食べる飲茶の習慣で知られているが、揚州では朝食に点心を食べる「早茶」という嬉わしがある。揚州を訪れたら、ぜひ体験したい伝統的な習慣だ。

早茶を楽しめる店として挙げられるのが、「富春茶社」と「怡春花園」の2店。いずれも100年以上の歴史を誇る老舗だ。

中でも、瘦西湖の近くにある怡春花園は運河に面しており、水辺の眺めを楽しみながら、ゆったりと点心を味わうことができる。

平日の朝8時に怡春花園を訪れてみれば、既に店内はほぼ満席。朝5時から営業しているとのことで、いずれのテーブルも、湯気を立ち上らせる大きな蒸籠を真ん中に置いて、なごやかに談笑する家族や友人同士のグループで賑わっている。地元の老人たちの姿も多く、朝から元気いっぱいだ。

早茶の定番が、ふかふかに蒸し上がった「包子」と呼ばれるまんじゅう。中身は肉や小豆あん、野菜などがある。たっぷりのスープと野肉を小麦粉を練った皮で包み込んだ「湯包」も、揚州名物の一つ。添えられてくるストローで皮を突き刺し、中のスープを全部飲んでから、皮と中身を食べるのが正しい食べ方だ。

ほかにはシューマイや蒸したギョウザなどがあり、いずれもサイズはかなり大きめ。朝からしっかり腹ごしらえができる。さまざまな点心の味はもちろん、活気溢れる雰囲気も存分に満喫したい。

早茶を楽しむ地元の家族。怡春花園にて

ふっくらと蒸し上がった包子が食欲をそそる

一日の朝は早い地元の人で賑わう怡春花園。朝から活気に溢れている

鎮江

宋の時代からの町並みが残る古都

いにしえの川辺の港町 宋代の古街に迷いこむ

長江と京杭大運河の合流点にある鎮江は、唐代から水運の中枢として栄え、中国の南北を結ぶ要衝となった町だ。

長江のゆるやかな流れにより添うように広がるこの町には小高い山がいくつもあり、頂上から長江を望む展望ポイントが点在している。近隣の南京や揚州に比べ、町の規模は小さくこぢんまりとしており、穏かで落ちついた風情が漂う。

長江に沿って延びる長江路の西側、少し奥に入ったところに、時を忘れたような風情を残す一角がある。宋街と呼ばれる古街だ。

今から約1600年前の東晋時代に造られ、唐と宋代に栄え、その後、元、明、清とさまざまな時代を経てきた。中央を貫く通りの名前が西津渡街であることから、「西津渡歴史文化地区」あるいは「西津渡古街」とも呼ばれている。

かつて、この古街のすぐそばには船着き場があり、唐の時代から港町として大いに賑わった。しかし、長江を流れる土砂が次第に堆積して、陸地との距離が広がっていき、清代の後は港町としての役割を失っていったという。

今では古街と長江までの間は約300メートルも離れており、もはや街から川の眺めを望むことはできない。改めてこの街の辿ってきた歴史の長さを実感させられる。

今も残る元の時代の石塔。歴史が生活に息づく街路

宋街の通りの長さは、全部合わせても約1キロ。いずれも車が入らない石畳の路地で、街の規模もさほど大きくないので、のんびり気ままに散策できる。

この古街の特徴は、唐、宋、元、明、清の五つの時代の建物が共存していることだ。街の一角に延びる通り、小龍巡街には石を積んで造られたアーチ型の入口の門がいくつも残く。この通りの両側に建つ昭関石塔は、元の時代に造られたチベット仏教の仏塔だ。街路に建つ石塔では中国で最古のものとされる。高さ約5メートルのこの仏塔は保存状態もよく、美しい姿で残されており、宋街を象徴する建築物となっている。

街のほぼ中心、小龍巡街と西津渡街が交わる高台に建つあずまや、待渡亭はかつてここが港町だった頃の船の待合場所。そのすぐ前の坂道には、荷物を運ぶためにつくられた一輪車用の長いわだちが残されている。今でも、自転車やバイクの通り道として街の人々に活用されており、歴史が今の生活に自然に溶け込んでいる様子を目にすることができる。

小龍巡街をさらに西に進むと、右手に瀟洒な赤レンガ造りの洋館が見えてくる。19世紀の清の時代に建てられた元英国領事館だ。彼インド式建築と呼ばれるこの建物は、今は鎮江博物館となっており、3万点の文物を所蔵している。

多くの人で賑わう宋街の小龍巡街

風情溢れる宋街の路地。石畳りの路地を散策する楽しさがある

元代に造られたチベット仏教の仏塔、昭関石塔

19世紀、清の時代に建てられた英国領事館。今は鎮江博物館

小龍巡街に残る明清時代の建物

一輪車用に作られた古いわだちが幽玄の雰囲気を漂わせる

雪舟も訪れた「白蛇伝」の舞台

金山寺

流砂によって陸と結ばれた長江に浮かぶ小島

鎮江の町の西側、長江に面して高さ43.7メートルの小高い山、金山がそびえている。もともとは、長江の中に浮かぶ小島だったが、長年にわたって流砂が堆積したことにより、清代には町と陸続きになった。金山という名の由来は、かつてこの山から金が採掘されたからと言われている。

山全体が金山寺という寺になっており、今から1600年前の東晋時代に創建された。ふもとから見上げると、山の斜面全体を埋め尽くすように寺の建物が連なっており、重なり合った鮮やかな黄色の瓦が印象的だ。本殿にあたる大雄宝殿は、どっしりと威風堂々たる建築で、南面の壁を覆う美しい彩色の装飾が素晴らしい。

この寺は、中国に古くから伝わり、京劇でも上演されている有名な説話「白蛇伝」の舞台としてよく知られている。人間の娘に姿を変えた白蛇が、人間の青年と恋に落ちるという物語だ。

娘が白蛇の化身だと見抜くのが、この金山寺の住職、法海である。白蛇伝では、青年を救うため、二人の仲を裂こうとあらゆる手を尽くす法海の姿が描かれている。寺の敷地内には、白龍洞と法海洞という2つの洞窟があり、白龍洞には白蛇が姿を変えた娘の像、法海洞には法海の像が建っている。

金山の頂上に建つ高さ30メートルの慈寿塔

雪舟が描いた七層の楼閣 長江を望む慈寿塔

金山の頂上に建つ高さ30メートル、七層の慈寿塔はこの寺を象徴する建物として知られる。塔の上にのぼれば、長江とその向こうにかかる揚子江大橋、鎮江の町を眼下に一望できる。最初に建てられたのは1400年以上前だが、戦争によって破壊されたため、清代に現在の姿に再建された。

この塔は、日本と縁のある場所でもある。室町時代の画家・雪舟は、水墨画を学ぶため、遣明使の船に乗って明代の中国に渡り、水墨画を学んだ。約2年間の中国滞在中にこの寺を訪れており、1472年に長江とこの塔を描いた絵を残している。

金山寺のふもとには中泠泉という泉が湧いており、その水質の素晴らしさから唐代より「天下第一泉」と呼ばれている。ちなみに天下と名のつく泉は全部でもつあり、蘇州の虎丘に第二泉、揚州の大明寺に第五泉がある。天下第一泉のそばには塔影湖という湖がゆったりと広がっており、今は、金山と合わせて金山公園という公園となっている。

山の斜面を埋めつくすように、寺の建物が重ら並ぶ

金山寺の本殿、大雄宝殿

金山のふもとにある金山寺の入口。橋上に見えるのが慈寿塔

清代から続く老舗 鎮江名物の香酢専門店

食堂や茶館、雑貨を売っている店などが多く集まり、街中で最も活気に溢れているのが小碧巷街の東側だ。店の間に民家も点在しており、軒先におばあさん達が仲良く話し込んでいたり、子どもが遊んでいたり、人々の暮らしをかいま見ることができる。

酢醸の両側に建ち並ぶのは、明清の時代に造られたという二階建ての家々。灰色の石をレンガ状に積み上げた壁に、「茶」や「酒」などの文字が書かれたカラフルな旗がはためき、赤いちょうちんがよく映える。

鎮江は、中国を代表する酢の産地として知られており、ここで造られる鎮江香酢は日本でもお隣様みの調味料となっている。小碧巷街の東側、四清巷街にほど近い「恒順醸坊」はさまざまな種類の鎮江香酢を扱っている老舗だ。

100年以上の歴史を誇り、清代に創業したこの店は、昔ながらのアンティークなたたずまいが印象的。壁には古い写真などが貼られ、店の奥には黒酢の入った大きな瓶がいくつも並んでいる。

片隅にあるカウンターの棚には料理用はもちろん、飲用の黒酢などさまざまな種類の酢が並び、見ているだけでも楽しい。これらの商品は、店員に頼めば自由に試飲させてもらえる。一口飲めば、コクのある酸味が口の中に広がり、旅の疲れも吹き飛ぶ思いだ。宋街の喧騒の途中に、ぜひ立ち寄りたい。

恒順醸坊の店内ではいろいろな種類の試飲ができる

店内には醸造の入った大きな瓶が並ぶ

●中国事情

女流作家パール・バックの旧居を訪ねる

Pearl Sydenstricker Buck "The Good Earth"

鎮江駅前の大通り、中山西路から長江側に南州山路という細い通りが延びている。この通り沿いにひっそりと佇むのがアメリカの女流作家、パール・バックの旧居だ。

バックは生後まもなく、宣教師の両親とともに中国に渡り、18歳まで鎮江で過ごした。その後アメリカに帰国するが、再び鎮江に戻り、20世紀前半の中国の人々を題材とした小説を次々と発表。1932年には中国の農村生活を描いた3部作の小説「大地」でピューリッツァー賞を受賞。その後、1936年「中国における農民の生活の豊かにして叙事的描写と、故郷の伝記的傑作に対して」ノーベル文学賞が贈られた。「ラッシュ大使館」や「愛蓮姉」という中国名を名乗ったバックを「東洋と西洋の文明のかけ橋となる人物」と称賛した。

木々に囲まれた白壁はレンガと本造の温和な雰囲気。館内では、バックの著作に関する展示を見ることができる。

三国志ゆかりの見どころが集まる

北固山

劉備と孫権の妹が見合いをした「甘露寺」

長江に面し、街の東側に位置する高さ58・5メートルの北固山は、金山と鎮江に浮かぶ焦山と並び、「京口三山」と呼ばれる鎮江の名所の一つ。切り立った険しい山全体が一つの公園となっており、頂上には甘露寺へと続く花崗岩の石段

北固山の頂上に建つ甘露寺。三国志の舞台として知られる

甘露寺の多景楼から北大江を眺む

180余年前の唐の時代に創建された古刹、甘露寺が建っている。

甘露寺は、三国志で重要な役割を果たした場所としてよく知られている。劉備率いる蜀と孫権率いる呉は、同盟を結んだ赤壁の戦いで曹操率いる魏に見事勝利する。その後両者の間に勢力争いが起こり、劉備の力を弱めるため、孫権が自分の妹、尚香と政略結婚させることを思いつく。劉備と尚香の見合いが行われたのが、甘露寺の中にある多景楼だ。

多景楼は北固山で最も見晴らしのよい場所にあり、長江の雄大な流れを一望することができる。多景楼の一角には、劉備と尚香の婚礼の様子を再現した人形も展示されている。

多景楼のそばの長江岸は、劉備が脱出したという断崖を囲いて、絶壁した美の刻香が長江に身投げした場所として知られる。山のふもとにある試剣石は、劉備と孫権がそれぞれ刀剣を降りおろし、どちらが天下をとるかを占ったとされる石。三国志にまつわる見どころが点在しており、その世界に存分に浸ることができる。

望郷の想いをうたった阿倍仲麻呂の歌碑

甘露寺に至る山の中腹にある鉄塔も、北固山の見どころの一つだ。高さ8メートル、八角形の仏塔で、今から1000年以上前、唐代の825年に建てられた。保存状態もよく、渋い赤茶色でどっしりとした印象の建造物だ。

この鉄塔のすぐそばに、白い大理石の碑が立っている。

「天の原　ふりさけ見れば春日なる
三笠の山にいでし月かも」

そこに刻まれているのは百人一首にも選ばれた、日本人に馴染みの深い和歌である。石碑にはこの歌と、中国語に訳した漢詩が並んで刻まれている。

歌の作者、阿部仲麻呂は奈良時代に遣唐使として中国を訪れ、科挙に合格して高級官人として時の皇帝玄宗に重用された。数十年の勤務の後に日本へ帰国しようとするが、船が遭難してしまう。やむなく再び西安に戻り、祖国に帰ることなく、生涯を終えた。

石碑に刻まれた和歌は、中国の地で、日本への望郷の想いをこめて詠まれたものだ。この歌を刻んだ碑は西安にもあるが、こちらは1990年に建てられたもの。一説によれば、阿倍仲麻呂がこの北固山のふもとに一泊した時に詠んだという。歌が詠まれた時や場所については諸説あるが、日本と中国との結びつきを感じることができる。

阿倍仲麻呂の望郷と漢詩が刻まれた碑

常州

温泉湧き出でる湖と竹林の里

世界最大を誇る13層の仏塔は珠玉の仏教芸術の宝庫

南京と上海のほぼ中間、北に南に位置し、工業都市として栄えてきた常州。近年は観光にも力を入れており、歴史や豊かな自然を生かした見どころが集まる。

街を代表する名所、天寧禅寺は唐代に建立され、1300年の歴史を誇る古刹だ。塔は、2002年に建立された高さ154メートル、13層の天寧宝塔。鉄

天寧禅寺の最大の見どころ、13層の天寧宝塔

天寧寺塔。観光地としては世界最大の仏像

檜材に繊細な彫刻を施した千手観音。香りがよく、美しい香りが漂う

天寧寺塔より市内を望む

防構造としては世界最大の仏塔とされる。一塔の中に入ると目を奪われるのが、中央の壁を隙間なく埋め尽くす金色の1千体の仏像。そして頭上を覆う幅3メートル、長さ72メートルに及ぶ巨大な七宝焼の天井絵だ。32体の観音と大仏が、黄金の雲に鮮やかな色彩で流麗に描かれている。

館内には東西50キロに及ぶ天然水晶の仏像や、希少な銅製の巨木から彫り上げた千手観音など、技巧を凝らした仏教美術が多数展示されている。エレベーターで最上階まで昇れば、常州の街を一望できるほか、夜ごと行われる壮麗な塔のライトアップも見どころの一つだ。

天寧禅寺に隣接する紅梅公園は、その名の通り梅の名所。3月になると一面に咲き誇り、園内はほのかな甘い香りで包まれる。

風光明媚な天目湖のほとりには幽玄な竹林や広大な温泉も

郊外に足を延ばすと、豊かな自然が待っている。市内から南へ車で約1時間、「緑の仙境、江南の真珠」と称される天目湖は、常州が誇るもう一つの観光名所。青く澄んだ湖のほとりには快適なホテルがあり、遊覧船巡りやウォータースポーツなどを楽しみながら、ゆったりとくつろぐことができる。水質がよく魚がおいしいことでも知られ、郭小平も絶賛したという新鮮な魚料理も楽しみの一つだ。

周囲に温泉もあり、自然豊かなリゾートとして知られる天目湖

天目湖のほとりに広がる南山竹海は、一面の竹林に覆われ、幻想的な雰囲気を醸し出す場所。自然の美しさをそのまま生かした観光地として知られ、静けさと神秘な美しさを堪能できる。

この一帯は温泉に恵まれた土地でもあり、南山竹海のそばには、広大な敷地を誇る温泉リゾート「御水温泉」がある。美しい竹林を望む露天風呂を備え、本格的なスパを備えるなど、温泉好きの日本人も満足させる充実した施設が揃っている。

中国専標 中華恐龍園

中国全土の恐竜の化石を集めた中華恐龍園

常州の街の北部にある「中華恐龍園」は、中国で最大規模を誇る恐竜の展示館。全長22mに及ぶ巨大恐竜をはじめ、中国各地から出土した骨の化石を見ることができる。広大な敷地には遊園地やホテルも併設されており、2009年8月には、天然温泉施設が新しくオープン。日帰りはもちろん、園内でのんびり滞在も楽しめる。

中華恐龍園に展示されている全長15m、高さ8mの恐竜の化石。山東省から5出土した

泰州

新名所登場で注目の知られざる古都

風情溢れる老街、船で河巡り 注目の「鳳城河風景区」

揚州から北京へ車で約1時間、ゆるやかに蛇行する長江下流の北側に位置するのが泰州の街だ。日本ではほとんど馴染みがないが、その歴史は漢の時代にさかのぼり、中国では現国家主席、胡錦濤の出身地として知られている。

海外からの投資が活発で、市内は近代的な建物が建ち並ぶが、その中に歴史を感じさせる見どころが共存している。近年は観光にも力を入れており、さまざまな新名所が生まれている注目の街だ。

ぜひ訪れたいのが、2008年に誕生した鳳城河風景区。約700年前に石塀として作られ、街を取り囲むように流れる城河に沿って、緑の中に楼閣や庭園などがゆったりと点在する美しい水辺の景勝地だ。

城河に面して建つ軍落楼は、宋の時代に建てられた楼閣を再建したもので、最上階に登れば風景区を一望できる。対岸に広がる梅園は、4月になると桃の花が満開となる。

泰州は日本でも広く知られる京劇の名俳優、梅蘭芳の故郷でもある。梅園のそばに建つ梅蘭芳記念館では、20世紀に激動の生涯を送った彼の生涯を辿ることができる。

美しくライトアップされた夜の鳳城河風景区

観海楼からは鳳城河風景区を一望できる

明清時代の町並みが残る鳳城河風景区の老街

日本でもよく知られる京劇の名俳優、梅蘭芳の生涯を紹介する梅蘭芳記念館

梅蘭芳記念館の静謐な中庭。彼の中央に建つのは支彫に捧じた梅蘭芳の像

風情区の東側にある老街は、明清時代の町並みがそのまま残るエリア。レストランも多く集まり、日が暮れてから、食事やそぞろ歩きを楽しむ人々でますます賑わいを見せる。老街にある船着き場から遊覧船に乗り込み、華やかにライトアップされた城河巡りなど、夜の水辺を眺めるのも楽しみの一つ。水上には舞台も設けられており、船の上から昆劇のハイライトを見ることもできる。

街の中心部にも、見どころが点在している。光孝寺は東晋時代に建立され、1600年以上の歴史を誇る律宗の古刹。数多くの世界的な名僧を輩出しており、境内には1000年前に造られた南唐時代の塔が今も残り、その歴史を感じさせる。

明代末に塩の取引で財を成した商人が作った庭園「書画舫」も見どころの一つ。邸内には庭園の歴史と同じ400年以上の樹齢を誇るカシワの木が今も残り、竹林や池、太湖石を配し、変化に富んだ景観を作り出している。

貴重の往用試験、科挙が実際に行われていた場所に造られた中国科挙医試博物館も興味深い場所だ。実際に出題された問題や合格通知などの展示、三日三晩、受験者たちが一歩も動かずに問題を解いたとされる試験会場が再現されるなど、楽しみながら科挙について学ぶことができる。

1600年の歴史を誇る名古刹や科挙の歴史をたどる博物館も

歴史ある建物を活用した中国科挙医試博物館

書画舫に置かれた彫像が楽しめる庭園

南通

黄海と長江に接する風光明媚な観光地

江蘇省南部に位置する南通市。人口770万人を有する大都市である。東は黄海に接し南には海のような広さを持つ長江が流れる。昔から紡績業や水運で発展してきた工業都市で、現在は日本や韓国など外国企業の進出も多く、1970年代以降、江蘇省のなかでも発展著しい都市だ。2008年に南通大橋と高速道路が開通したことによって、上海や蘇州のある長江南岸と直結、南通の経済発展はますます勢いづいている。さらに、上海や江南からの観光客が増大、南通は江蘇省の中でも観光客の増加が著しい地域となっている。中でも、南通で最の観光区、狼山には年間100万人もの観光客が訪れ、江蘇省でも有数の観光地となっている。

南通を語る上で欠くことのできない人物が張謇（ちょうけん）である。南通生まれの実業家で紡績業で財をなした。清末期における中国の有数の実業家として知られる。張謇は私財を投じ、南通の工業化と都市化を図るとともに、中国で初めての師範学校や博物館、紡績学校、雨綱学校、貧民学校などをこの地に造り、南通の教育の近代化にも大きな役割を果たした。

この張謇が清末期に建てた博物館が市内の南通博物苑のなかに今も現存している。北京の故宮よりも古く中国では最も歴史ある博物館の一つである。また苑内には欧州建築様式を取り入れたレンガ造りの後の別荘も残されており見学客で賑わっている。

張謇が清末期に建てた博物館、南通博物苑の中に現存している

レンガ造りの張謇の別荘。門や塀中の赤い縞取りが印象的な美しい建物だ

年間100万人が訪れる狼山風景区

南通市の南郊外にあって広大な長江のほとりに立つのが狼山である。標高108メートルの小高い山であるが、名前の由来は、伝説上一匹の白い狼がいたから、山の形が狼に似ているからともいわれる。仏教山として知られ、五台山（山西省）、普陀山（浙江省）、峨眉山（四川省）、九華山（安徽省）の中国4大仏教山に続く有数の仏教山として位置づけられている。財、官、福、禄（出世、寿といった人間の願いをすべて叶えてくれる山として有名で、参拝者がひっきりなしだ。

ロープウェイで山頂に上ると広教禅寺というお寺があり、すぐそばに四角五層の塔（文峰塔）がそびえ、その姿はなかなか絵になる。寺は唐時代（669年）、時は1000年前の北宋時代に建てられたものだが、のちに修復されている。頂上からは眺望を観賞するが、美しい庭園から支笏湖を連想する景観は実にすばらしい。南通市では、このほかにもお城の外壁の遊覧が楽しめる濠河風景区をはじめ見どころも多く、交通網の整備と相まってさらなる観光客の伸張が期待できそうだ。

江蘇省内の美しい風景から注目を集める観光地の狼山風景区

連雲港

観光客でにぎわう孫悟空のふるさと

江蘇省の北東部、渤海と黄海を分ける山東半島の南側の付け根に位置する人口470万人ほどの港町である。海エビなど海産物の産地がさかんで、水産などの総物資の産地としても知られている。また、大陸横断鉄道「新ユーラシア・ランドブリッジ」の東の起点ともなっており、日本や韓国からの貨物船が連雲港に着き、ここから出発したコンテナ貨物は中国側の隴海（ウールハイ）鉄道山口を経てユーラシア大陸を一路西へとひた走り、オランダのロッテルダムへと運送される。鉄道は天山北路に並行して走っていることから、新シルクロードとも呼ばれる。

この連雲港を観光地として有名にしているのが、花果山つまり中国の伝奇小説西遊記の主人公、孫悟空が生まれた山の存在である。そのせいか、町のいたるところで、孫悟空の像やレリーフを見かける。

花果山は海抜625メートルほどだが、江蘇省では最も高い山だ。西遊記をのぞくと、孫悟空は花果山の仙石という石から生まれ、この周辺の猿たちを従えて王となり、猿たちとともに花果山にある水簾洞に住みついた。その昔、天界で大暴れして、お釈迦様に五行山に封じ込められてしまうという話はご承知の通りだ。その水簾洞は花果山の中腹辺りにあり、入口には小滝がかかっている。洞の中に入って行ったり、記念写真を撮る観光客で賑わっている。周辺には猿が多くいて、小滝も今もここは猿たちの楽園であるようだ。

歴史的価値高い摩崖石像

連雲港には歴史的な見どころも多い。市の郊外に孔望山という山があって、ここは紀元前400～500年ものの前漢時代に、孔子がこの山に登って海を見たということに因んでそう呼ばれるようになった。孔子の故郷は山東省の曲阜なので、連雲港とは遠外と近い。

孔望山を有名にしているのが、山に刻まれた摩崖石像である。110もの石像が彫られており、さまざまな石像から仏教が中国にわたった証拠とされている。一説によると、これらの石像が彫られた年代は、紀元300から500年頃に彫られた敦煌の莫高窟や雲冈石窟、龍門石窟より300年ほど早いとされ、紀元後の早々に仏教がインドから海を渡ってこの地に伝わった可能性もあるという。

日本に初めて渡った中国人、徐福

連雲港は徐福伝説で知られる徐福のふるさとでもある。徐福は紀元前200年以上も前、秦の始皇帝の命で、不老不死の薬を求めて初めて日本に渡った中国人と伝えられ、弥生時代の頃の九州の佐賀に上陸、徐福の墓が残る和歌山の熊野をはじめ日本各地にその足跡を残している。一説には日本に稲作技術を伝えたのは徐福ではないかとも言われている。もっとも、紀元前の話だによると、徐福の行動は逃亡が目的だったようで、偶然通り着いたのが九州であったというのが本当のところのようだ。連雲港から車で1時間ほど行った金山鎮という村に立派な徐福記念館が建っている。

江蘇省で最も高い山（625メートル）花果山の頂上から望む。眼に囲まれ眺めが気持ちよい

ホテルのロビーにも西遊記の壁画が

孫悟空の横顔。水簾洞観光客がひっきりなしに訪れる（左）
可愛い孫悟空（上）

江蘇省基本情報

省都　南京

人口　約7625万人

民族
漢族が大多数を占める。そのほかに55の少数民族がある。

通貨
通貨単位は、「元」。
1元＝約14円（2009年9月現在）

時差
日本との時差は、 1時間。

概要
江蘇省は長江の下流に位置し、黄海に臨む。北西には安徽省、山東省、南東には浙江省に接している。かつては人や物が行き交った京杭大運河が流れており、昔から交通が発達していた。また、中国で4番目に大きい太湖がある。

江蘇省には、南京市や蘇州市、徐州市など13の市が設置されている。

歴史
春秋時代には、呉および楚の国に属し、紀元前514年に呉の国の都となった。紀元2世紀頃の三国志時代には魏・蜀の国とともに鼎を競ったことはあまりにも有名。明代には南京に都が置かれた。清代に江寧省と蘇州府が合体して現在の江蘇省となった。江蘇省という名前はそこに由来している。

電圧とプラグの形
電圧は220Vで周波数は50Hz。
プラグはCタイプが一般的ですが、SEタイプのものも時々見かけます。お国柄、地域により事情が異なったり、同じホテルでも改修などにより、階、部屋によってタイプが異なる場合もあります。

季節感溢れる江蘇省の旅
江蘇省は鹿児島とほぼ同じ緯度に位置しており、日本と同じように四季や梅雨の季節がある。旅行をする際には、同時期の日本と同じ服装でほぼ問題ない。

4月から5月にかけては、平均気温も25度以下と過ごしやすく、緑も美しい季節である。とくに蘇州周辺に点在する庭園では色とりどりの花が咲き、観光客の目を楽しませてくれる。6月下旬には日本と同じように梅雨の季節が訪れ、雨がしとしと降る日が続く。それが終わり、夏になると、暑さが厳しくなり、こまめな水分補給など暑さ対策が必要になるが、どの池にも大輪の蓮の花が咲き乱れる。9月を過ぎると秋を迎え、蘇州の庭園や自然が多い南京などはいたるところで紅葉が始まり、街全体が落ち着いた雰囲気になる。また、雪はあまり降らないが、緯度の割には寒さが厳しい。

上海へ、
全国15都市から直行便が就航
日本各地から上海へは、日系もしくは中国系航空会社がほぼ毎日直行便を運航している。上海までは成田から約3時間、大阪からは約2時間。観光の中心地蘇州へは上海浦東国際空港から高速道路で約1時間半。また、上海中心地からは新幹線も運行しており、南京まで2時間で行くことができる。なお、2010年に新しく完成する新幹線では、南京まで1時間に短縮される予定。

成田発：週91便　旭川発：週2便
関西発：週70便　沖縄発：週2便
中部発：週42便　秋山発：週2便
福岡発：週21便　徳島発：週2便
広島発：週7便　小松発：週2便
新潟発：週4便　岡山発：週2便
仙台発：週3便　鹿児島発：週2便
札幌発：週3便　（2009年9月現在）

月別平均気温と降雨量（ミリ）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
蘇州	最高	8℃	10℃	13℃	20℃	24℃	28℃	32℃	31℃	28℃	22℃	17℃	11℃
	最低	2℃	4℃	7℃	12℃	17℃	22℃	26℃	26℃	22℃	17℃	11℃	5℃
	降雨量	77.5	50.6	94.3	71.7	93.3	195.2	116.6	224.6	70.7	58.6	49.1	46.5
南京	最高	8℃	9℃	12℃	17℃	22℃	24℃	27℃	30℃	26℃	20℃	18℃	11℃
	最低	1℃	2℃	5℃	10℃	14℃	18℃	21℃	23℃	20℃	14℃	9℃	4℃
	降雨量	50	70	100	120	140	170	130	140	210	190	90	50

江蘇省オフィシャルガイドブック
（中国江蘇省旅游局）

水辺の旅情　江蘇省 そぞろ歩き

●取材・執筆
井上理江　田中悟　雷鎮知夏
●写真
枚葉隆男　井上理江　牧原淳一郎
●表紙・本文デザイン
上釜一郎　山内千佳代
●地図
松本史子　中村雅人

2009年9月15日発行
●発行者
中国江蘇省旅游局
郵編 210003　南京中山北路 255 号　TEL：025−83421067
●企画・制作／発行所
㈱ヒルサイドパブリッシング
東京都千代田区有楽町１−５−１　日比谷マリンビル　TEL：03−3572−8111
●印刷所
月島写真印刷株式会社

許可なく転載・複製することを禁じます。
©㈱ヒルサイドパブリッシング

ご覧いただきありがとうございます！